

彙 報

国際学会ニュース News of International Conferences

国際学術会議「方形文字—750」
International Conference on Square Script - 750

松 川 節 (大谷大学)
MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2019年5月30日～5月31日、モンゴル国ウランバートル市のモンゴル国立大学2号棟円形講堂において、国際学術会議「方形文字—750」(方形(いわゆるパクパ)文字制定750周年記念国際シンポジウム)が、モンゴル国大統領後援、モンゴル国立大学総合科学部、モンゴル仏教センター・ガンダンテグチンリン寺院、モンゴル科学アカデミー言語文学研究所、モンゴル国立大学図書館、パクパ基金の共催で開催された。モンゴル国、中国、インド、オーストラリア、日本から参加があり、日本からの参加者は松川のみであった。

5月30日09:00よりП. Дэлгэржаргал デルゲルジャルガル(モンゴル国立大学総合科学部人文科学系担当副学部長)の司会で開会式が開催され、Д. Заябаатар ザヤーバータル(モンゴル国立大学総合科学部学部長)、Ц. Хулан ホラン(モンゴル国大統領・文化宗教政策顧問)がそれぞれ登壇して式辞を述べ、Ө. Энхтүвшин エンフトゥブシン(モンゴル国副首相)の祝辞が紹介された。続いて方形文字を考案したサキヤ派の座主パクパに因んで、サキヤ派第42代当主のラトナ・ヴァジュラ・リンポチュエが短い講演をし、フビライとパクパを描いたタンカ画が、パクパ基金から会議主催者・会議報告者各位に贈呈された。

09:30、基調講演 Р. Отгонбаатар オトゴンバータル(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)“Дөрвөлжин үсгийн дурсгалын тойм.”(方形文字資料概要)が行われ、続いて午前のセッションは、В. Түвшинтөгс トゥブシントゥグス(モンゴル国立大学総合科学部)の司会で6本の報告がなされた:

- ◆Ц. Шагдарсүрэн シャグダルスレン(モンゴル国ウランバートル大学)“Монголын дөрвөлжин бичиг хятад хэлний баримт болох нь.”(漢語【史】資料としてのモンゴルの方形文字)
- ◆Гарди Галди(中国・内モンゴル師範大学)“Пагва ламтан дөрвөлжин үсгийг зохиоходо уйгуржин үсгийн бүтэц онцлогийг хүлээж лавласан нь.”(パクパ・ラマが方形文字を創作する際にウイグル文字の構造特徴を採用・参照したことについて)
- ◆Ш. Чоймаа チョイマー(モンゴル国立大学)“Хос ёсны сургаал хийгээд Сажа бандид Гунгаажалцаны зохиосон Субашид.”(二理説とサキヤパンディタ・グンガージアルツァン著スバ

シド)

◆松川節 (大谷大学) “Дөрвөлжин үсгийн хэрэглээний бодит байдлын зарим асуудал.” (方形文字使用の実態の諸問題)

◆Цэнгэл Чингел (中国社会科学院歴史研究所) “Өвөр Монголын Хэшигтэн хошуунаас илэрсэн хадны бичээсэн дэх дөрвөлжин бичгийн ул мөр.” (内モンゴル・ヘシグテン旗発見岩壁銘文における方形文字の痕跡)

◆Tenzin C. Ringpomsag テンジン・リンパポムツァグ (オーストラリア国立大学・パクパ基金) “Chos rgyal 'Phags pa and his Pivotal Role in the Cultural Enrichment of Qubilai Khan's Mongol Empire.” (フビライ・ハーンのモンゴル帝国におけるチョエギヤル・パクパとその枢軸的な役割)

13:00、会議参加者は、かつての映画制作所の北にあるサキヤ派寺院 (Sakya Pandita Dharma Chakra Monastery) に専用バスで移動し、オトゴンバートル氏個人蔵のコレクションを中心としたパスパ文字資料特別展示を鑑賞しつつ昼食を摂った。

30日午後のセッションは、同じくモンゴル国立大学にて、С. Янжинсүрэн ヤンジンスレン (モンゴル国立大学総合科学部) の司会で5本の報告がなされた:

◆Хасбагана ハスバガナ (中国・内モンゴル師範大学) “Төвөдөөс олдсон “Луу жилийн хааны зарлигийн бичиг” -ийн он жилийг шинжлэх нь.” (チベット発現「タツ年のハーンの聖旨文書」の年代比定)

◆Жамьяан Хайчог ジャミヤンカイチョー (中国・社会科学院世界宗教研究所) “Kublai Khan and Sakya Pandita's Contribution to Mongolian culture.” (フビライ・ハーンとサキヤ・パンディタのモンゴル文化への貢献)

◆Ц. Батдорж Батドルジ (モンゴル科学アカデミー言語文学研究所) “Дөрвөлжин бичгийн тогтолцоон дахь эр, эм гийгүүлэгчийн учир.” (方形文字体系における男性・女性子音の事由)

◆Саруул Сароул (中国・内モンゴル大学) “Дөрвөлжин үсгийн сурвалж дахь үй үе ба үй, еө (eyi), оүй, үө төгсгөлт үеийн тухай.” (方形文字文献における үй үе と, үй, еө (eyi), оүй, үө 閉音節字について)

◆С. Янжинсүрэн ““Цагаан түүх” сурвалж дахь Юань гүрний төрт ёсны үзэл санаа.” (『ツァーガン・トゥーフ』文献における元帝国の統治理念)

31日午前のセッションは、Ж. Лхагвадэмчиг ルハグワデムチク (モンゴル国立大学総合科学部) の司会で6本の報告がなされた:

◆Цагаансар ツァーガンサル (中国・内モンゴル大学) “Эрдэмтэн Зууннастын дөрвөлжин үсгийн тухай судалгааг өгүүлэх нь.” (学者ゾーンナストの方形文字研究について)

◆Н. Амгалан Амгалан (モンゴル国ガンダン寺学術文化研究所) “Дундговиос олдсон дөрвөлжин үсгийн тамга.” (ドンドゴビ発現の方形文字印)

◆Өлзийбаяр Улзй-Баяр (中国フフホト職業学院) “Бадгар сүмийн дуганы үүдэн дэх дөрвөлжин үсгийн бичээсүүдийг тайлбарлан унших нь.” (五当召堂宇門柱の方形文字釈読)

◆Г. Мягмарсүрэн Миагмарслен (モンゴル国・ダシチョイリン寺仏教文化研究所) “Пагва ламаас Их Монголын Юань гүрний хан хөвгүүдэд зориулсан хос ёсны сургаалын тухай.” (パクパ・

ラマから大モンゴル・元帝国の王子たちに向けた二理の教えについて)

◆ 宋洪民 (中国・済南大学) “On the Seal of hP’ags-pa Script: Gansu Dengchu Xingzhongshusheng Zhaomosuo Yin.” (パクパ字官印「甘肅等処行中書省照磨所印」について)

◆ Ц. Мөнх-Эрдэнэ モンフエルデネ (モンゴル国・ダシチョイリン寺ズーンフレー学院) “Сажабын сайн номлол хэмээх шастирын утга.” (サキヤ格言の意味)

12:30、全体討論と閉会式が開催され、昼食後、会議参加者は専用バスにてウランバートル市西郊60キロのトゥブ県アルガラント郡に位置するパクパ基金所有のサキヤ派寺院建築用地に赴き、広大な敷地の中心に建てられた全高4.3メートルの「方形文字制定750周年記念碑」の除幕式を見学し、さらに近辺のツーリスト・キャンプにて情報交換を兼ねた懇親会に参加した。深夜にウランバートルに帰還し、会議の全日程が終了した。

国際学術研究討論会「モンゴル文学研究分科史—整理と解釈」

International Conference on “Academic History of Mongolian Literature: Sorting and Interpreting”

岡田 和 行 (東京外国語大学)

OKADA Kazuyuki (Tokyo University of Foreign Studies)

2019年6月23日(日)、中国・内モンゴル自治区の区都フフホトで、国際学術研究討論会「モンゴル文学研究分科史—整理と解釈」(モンゴル語では“Mongyul uran jökiyal-un sinjilegen-ü salayan-u teüke – emkilel kiged tayilul” olan ulus-un erdem sinjilegen-ü sudulul-un yarilçaqu qural, 中国語では“蒙古文学学科史—梳理与阐释”国際学術研究会)が開催された。本会議は内モンゴル師範大学モンゴル学学院が主催し、日本モンゴル文学会が一部協力して行われたものである。

当日の朝8時30分からフフホト市内の博曼海航大酒店(モンゴル名はBuman qayırqan bayudal, 英名はBoman HNA Grand Hotel)4階大会議室で挙行された開会式は、司会の内モンゴル師範大学モンゴル学副学院長の聚宝(Jui Bao)教授の開会の辞に始まり、内モンゴル師範大学モンゴル学学院長の満全(Man Quan / Dorunatngri)教授の歓迎の辞、内モンゴル師範大学の王来喜(Wang Lai-xi)副学院長の祝辞、内モンゴル大学モンゴル学学院のゲレルト(Ba.Gereltü)教授の祝辞、日本モンゴル文学会を代表して清泉女学院大学の芝山豊(Y.Shibayama)教授のビデオレター形式による祝辞と続き、最後に内モンゴル師範大学モンゴル学学院モンゴル言語文学研究所長のダライ(Dalai)副教授による同研究所創立40周年記念学術研究活動報告が行われた。そして80名あまりの参加者の記念集合写真の撮影をもって開会式は終了した。

次に10時すぎから同会場で、内モンゴル師範大学モンゴル学学院党副書記・副学院長のオランチメグ(Urančimeg)副教授の司会により、以下の8本の基調講演が行われた。紙幅の関係で講演者名、所属、職名、題目のみを記すこととした。

1. ツェレンソドノム(D.Tserensodnom) モンゴル国科学アカデミー会員「モンゴル叙事詩研究の理論と方法論の問題について」
2. テレングト・アイトル(Telenggüd Ayiqubtur / Telengut Aitor, 艾特) 北海学園大学教授「プリンベヒ(B.Bürinbeki)の詩学研究と非アリストテレス的詩学思想」
3. ジャルガル(Č.Ĵiryal) 内モンゴル大学教授「モンゴル文学史の記述について考慮すべきいくつかの問題点」
4. 全福(Quan Fu / Süyüge) 内モンゴル大学教授「モンゴル詩歌研究の歴史的道程」
5. ドラム(S.Dulam) モンゴル国立大学教授「モンゴル近代文学史の新しい時代区分について」
6. フレルシャー(Kürelša) 内モンゴル大学教授「ホルチン文化の中心地としての图什业图(Tüsiyetü)王府と王爺廟(Wang-un süm-e)=烏蘭浩特(Ulayanqota)」
7. 王満都嘎(Wang Manduy-a) 中央民族大学教授「モンゴル国近代文学の理論と批評の生成と発展」
8. 満全(ドルノテンゲル) 内モンゴル師範大学教授「モンゴル文学研究分科史に関わる諸問題」

昼食休憩後、午後2時から6時すぎまで3つの分科会に分かれ、博曼海航大酒店4階にある3つの中会議室で研究討論会が行われた。分科会はテーマ、ジャンル、時代、地域などによって厳密に分けられたものではなく、発表者の数をほぼ均等に3分割したものであった。日本からは岡田のほか、上記のテレングト・アイトル(北海学園大学)、そして芦村京(河合塾)、荒井幸康(北海道大学)、内田孝(大阪大学)、都馬バイカル(桜美林大学)の5氏が参加した。

第1分科会は、司会を内モンゴル師範大学の Cholmon (Č.Čolmon) 教授と岡田が担当し、講評をテレングト・アイトル教授と内モンゴル民族大学のスヘ (Ba.Süke) 教授が担当した。研究発表は全部で14本あった。以下、発表順に簡潔に報告する。

岡田和行 (K.Okada) の「モンゴル近代文学の時代区分の問題について—モンゴル国と内モンゴルの場合」は、モンゴル国立大学のガルバイル (G.Galbayar) 教授と内モンゴル師範大学の満全教授の論考に基づいて両地域の近代文学史の時代区分に関するいくつかの事例を紹介しながら、政治史に基づく時代区分ではなく、文学それ自体が持つ発展法則や内的要因に基づいて時代区分することが重要であると主張した。北京大学の陳崗龍 (Chen Gang-lon / Dulayan) 教授の「モンゴル比較文学研究の基盤と体系に関わる三つの問題」は、モンゴル文学が本来的に持つ比較文学的な特徴、世界のモンゴル研究者による比較文学的な研究、モンゴル人研究者による比較文学的な思想の生成と発展、これら三つの要素が「モンゴル比較文学研究」の体系を構築するための基盤となると説いた。内モンゴル民族大学のスヘ教授の「中国のモンゴル文学研究分科史に関わる諸問題」は、中国国内のモンゴル言語文学研究に関わる大学や研究機関の教育研究状況、大学紀要や学術研究誌の発行状況、中国国内で開催されたモンゴル研究に関わる国際学会や国内学会の開催状況を年代順に図表化し、その発展過程を詳述した。荒井幸康 (Y.Arai) 氏の「『カルムイク文学』の教科書におけるカルムイク人の視点から見たモンゴル文学」は、従来のカルムイク文学史では、カルムイク人がカルムイク語あるいはロシア語で書いた文学だけでなく、ロシア人であれその他の民族であれ、カルムイク地域で生まれた人が書いた文学もカルムイク文学の範疇に含まれているが、現在の「カルムイク文学」の教科書ではそれらがどのように教育されているのかを、ジャンルの類型と他の地域のモンゴル文学との関係性の中で検討した。内モンゴル社会科学院の樹林 (Shu Lin) 研究員の「モンゴル民族のチベット文学研究に関わる思考」は、モンゴル人の高僧たちのチベット語の著作を歴史的に回顧し、内外の研究者による研究を詳しく紹介しながら、チベット文学研究の経験と成果がモンゴル文学研究分科史においても重要な意義を持つと説いた。内モンゴル大学のハイルハン (Qayirqan) 教授の「モンゴル民族の現代詩学 (odukiči silüg jüi) 形成の歴史的概観」は、近代 (1902～1947年) から現代 (1947年～) にかけて生成発展し体系化され始めたモンゴル現代詩学を、リアリズム詩学・ロマンチズム詩学の形成期 (1950～1970年代)、リアリズム詩学・ロマンチズム詩学の拡大修正期 (1980～1990年代)、モダニズム詩学の発芽成長期 (1980～1990年代)、モダニズム詩学の順応期あるいは固有文化詩学の提示期 (2001年～) の3期4項目に分けて概観し、各期の詩学の特徴と研究状況について論じた。内モンゴル大学のオルスガル (S.Urusqal) 教授の「中華民国時代のモンゴルと日本の文学関係について—『大青旗 (Yeke köke tu)』誌を中心として」は、中華民国時代に「満洲国」の新京 (長春) で発行されていたモンゴル語の隔月刊誌『大青旗』(1943年1月創刊、1945年6月停刊) に掲載

された日本の小説や詩歌（芥川龍之介「鼻」、吉川英治「宮本武蔵」、森鷗外「山椒大夫」、宮沢賢治「雨ニモマケズ」、高村光太郎「最低にして最高の道」など）を翻訳した当時の内モンゴルの青年知識人たちの経歴と活動を紹介しながら、従来ほとんど知られることのなかった日本と内モンゴルの文学交流について論じた。

途中休憩後の後半には7本の発表があった。内モンゴル師範大学のチョルモン教授の「中華民国時代の日本の雑誌とモンゴル文学との関係について—雑誌『蒙古』を例にして」は、日本の月刊誌『蒙古』（善隣協会刊、1939～1944年）に掲載された「モンゴル秘史」などの書面文学や英雄叙事詩、民話、民謡などの口承文芸の翻訳紹介や研究批評は、戦前の日本におけるモンゴル文学研究の貴重な成果であり、モンゴル文学研究分科史にとっても一定の価値を有する業績であると指摘した。内モンゴル民族大学のアルタンゲレル（Altangerel）教授の「教職専門課程における中国少数民族言語文学の研究分科建設に存する諸問題」は、高等教育機関におけるモンゴル言語文学関係の教職専門課程が研究分科建設のために直面している困難な現状と課題について報告し、その解決の方途を探った。ロシア連邦ブリヤート国立大学のラリーサ・ハルハロワ（Larisa Khalkharova）教授の「ワレーラ・バサアの歴史的記憶をテーマにした作品の芸術的解釈」は、「満洲国」軍のウルジン・ガルマーエフ將軍（1888〔1889〕～1947年）を主人公にして、ブリヤート人の満洲への亡命・移住とその数奇な運命を描いた劇作家ワレーラ・バサア（Валера Басаа, 本名 Валерий Цыренович Дабаев, 1940年生）の「〔あなたがなくなって〕何と長い年月が過ぎたことか（*Ямар удаан болообиш даа*）」と「過ぎ去りし時代の風（*Үнгэрхэн сагай нэбиээн*）」という二つの劇作品の芸術的な解釈を通して、歴史的な記憶と正義の回復を訴えた。モンゴル国立教育大学のヤンディー（P.Yanidii）講師の「モンゴル短編小説の発展史の問題について—新世紀の短編小説を例にして」は、新世紀（2001年以降）のモンゴル国の短編小説をリアリズム的傾向の作品と非リアリズム的傾向の作品に二分し、前者では引き続き「永遠のテーマ」である男女の恋愛、親子の情愛などのテーマが優勢であるのに対して、後者では自由な探求に基づく斬新なテーマが優勢となり、その一例として、女流作家ウルズィートゥグス（L.Ulziitugs, 1972年生）の諸作品を高く評価するとともに、バトホヤグ（P.Batkhuyag, 1975年生）のようなポストモダン的な傾向の作家も登場してきたと述べた。西北民族大学のバト（Batu）教授の「モンゴルの口承文芸と書面文学の関係について」は、独立した固有の口頭伝承であり民間芸術でもある口承文芸と、識字者である知識人の専門的な技能によって生成発展し、その時代特有の文化と意識を体現してきた書面文学との相補的な関係を、厳密な方法論に基づいて科学的な見地から研究する必要性を説いた。内モンゴル師範大学のグライ副教授の「モンゴル口承文芸の研究分科建設と教育改革について」は、モンゴルの無形文化遺産の一つである口承文芸（民間文学）の収集と保存、研究成果の出版、高等教育機関における研究拠点の構築、専門教材の開発と編集、教科内容の改善、教育方法の改革などについて論じた。内モンゴル師範大学のアリマー（Alim-a, 阿丽瑪）修士研究生の「統計・解釈・実証—新時代のモンゴル詩歌研究について」は、新時代（1978～2018年）に内モンゴルで出版されたモンゴル詩歌（韻文）に関係する研究、評論、批評を、関係する専著、著作、論集、学位論文、モンゴル語の定期刊行物などから可能なかぎり広範に収集し、それらを統計学的に処理し分析した。

第2分科会は司会を桜美林大学の都馬バイカル准教授と内モンゴル大学のオルスガル教授が担当し、講評を北京大学の陳崗龍(ドラーン)教授と内モンゴル師範大学の聚宝教授が担当した。研究発表は全部で14本あったが、その内2名が欠席したため、実際の発表は12本であった。以下、発表順に氏名、所属、職名、題目のみ報告する。なお、第2分科会の項目作成にあたっては芦村京氏のご協力を得た。ここに記して感謝したい。

1. ハンガイ (Qangyai) 内モンゴル師範大学教授「チベット自治区ガリ地区で発見されたモンゴル文字文書の断簡とロブサンダンジンの『アルタン・トプチ』との文字数の統計比較研究」
2. オチ (Oči) 内モンゴル師範大学教授「モンゴル文学研究分科建設における民間文学と民俗学の占める位置」
3. 包金剛 (Bao Jin-gang) 内モンゴル師範大学教授「中国におけるホールチ(説唱芸人)の研究概説」【発表者欠席】
4. フグジルト (Kögjiltü) 赤峰 (Ulayanqada) 学院教授「『青史演義』に利用された13種の歴史文献について」
5. ハスゴア (Qasyuw-a) 内モンゴル師範大学教授「モンゴル英雄叙事詩の詩学 (silüg jüi) の〈三連構造〉の理論体系」
6. ボヤンバートル (Buyanbayatur) 内モンゴル師範大学教授「近代モンゴル人学者ボヤンチョールガン (B.Buyančiyul'an, 1885～1943年) について」
7. 聚宝 (Jui Bao) 内モンゴル師範大学教授「唐朝系列の歴史演義小説のモンゴル語訳本について」
8. ハスバートル (Qasbayatur) 内モンゴル師範大学教授「モンゴル民謡のバリエーションの教授法の研究—民謡『新師儿 (Sinšumar)』を例にして」
9. エルデネゴア (Erdeniyuw-a) 内モンゴル師範大学教授「モンゴル叙事詩における諺と格言の文化的多面性について」
10. 包海青 (Bao Hai-qing) 内モンゴル科技大学教授「古代モンゴル人の起源に関わる伝説の系統性について」
11. 呉タナー (Wu Tan-a) 内モンゴル師範大学教授「『青史演義』補完本における歴史事件について」
12. 芦村京 (T.Ashimura) 河合塾講師「内モンゴル師範大学で勉強して得たもの」
13. 領喜 (Ling Xi) 内モンゴル師範大学講師「アルタイ系諸民族の感光受胎をモチーフとする神話について」【発表者欠席】
14. オヨーンジルケ (Oyunjirüke) 内モンゴル師範大学修士研究生「モンゴル文学研究における最近のテーマの動向について—修士論文と博士論文を例にして」

第3分科会は司会を内モンゴル社会科学院のサラナー (Saran-a) 研究員と大阪大学の内田孝講師が担当し、講評をモンゴル国科学アカデミー言語文学研究所のムンフバイル (B.Munkhbayar) 研究員と内モンゴル大学のハイルハン教授が担当した。研究発表は全部で15本あった。以下、プログラムに記載された発表順に氏名、所属、職名、題目のみ報告する。

1. 内田孝 (T.Uchida) 大阪大学講師「新発見の『丙寅 (*Ulayan bars*)』誌 (第8期第6号、1942年6月発行) と同誌に掲載されたサイチングの二編の散文について」
2. 都馬バイカル (Tübüüd Baiyīal / TOBA Baigali) 桜美林大学准教授「ジョエル・エリクソン (Joel Eriksson, 1890～1987年) の見た内モンゴル社会の危機的状況—サイチングの作品を通じた探究」
3. トウクスバヤル (Tegüsbayar) 内モンゴル大学教授「1939年刊行のモンゴル人民共和国の雑誌『人民教育 (*Arad-un gegerel*)』とその最初の二号に掲載された文学作品の内容—D. ナツァグドルジ (?) がモンゴル語訳したアラブ民話『ちびっこのムカ (*Bičiqan Mūka*)』について」
4. チョルモン (N. Čolmon) 天津科技大学外国語学院教授「ナ・サインチョクトの創作活動の新しい時代区分と日本の詩人たちとの比較研究の可能性について」
5. ナミヤー (Namiy-a) 内モンゴル社会科学院研究員「媒体としてのモンゴル近代文学」
6. ムンフバヤル (B.Munkhbayar) モンゴル国科学アカデミー言語文学研究所研究員「モンゴル近現代文学の手法と詩学 (*туурвил зүй / poetics*) の関係について」
7. ウランバートル (Q.Ulayanbayatur) 内モンゴル民族大学教授「新世紀のモンゴル語小説のパラテキスト (*ded tekst / paratext*) について」
8. ナンディンビレグ (G.Nandinbileg) モンゴル国立大学教授「モンゴル近代文学における女性のコンテクスト (*хам сэдэв / context*) —E.オヨーンとS.オドバルの小説を例にして」
9. 初一 (Chu Yi) 内モンゴル師範大学教授「D. ナツァグドルジの小説におけるモダニズム的傾向」
10. ムンゲンチメグ (Mönggünčimeg) 内モンゴル師範大学副教授「伝統的精神文化を継承する意味—ガルダンワンチョグドルジ (*Галданwangčuydorji*) の『悔悟の詩 (*Gemsil-ün silüig*)』を題材として」
11. チョルヒル (Čulikir) 内モンゴル師範大学副教授「精神の色彩と旋律—S.エルデネの散文作品について」
12. 華玉 (Hua Yui) 内モンゴル師範大学副教授「1950～1970年代モンゴル文学の史料学的研究」
13. 元成 (Yuan Cheng) 内モンゴル師範大学講師「アグワントゥブデン (*Aγwangtübden*) のチベット語の詩論書『詩鏡論備忘録 (*Jokistu ayal-yu-yin toli-yin toytaγaysan-u temdeglel duradqal-i todurayuluyči kemegdekü orusibai*)』の序と跋の詩文に関する翻訳と解析」
14. ドルスガルト (Durasqaltu) 内モンゴル師範大学副研究員／モンゴル国立教育大学博士研究生「メルゲン・ゲゲン (*Mergen gegen*) の詩歌に反映された哲学的教育思想の分析」
15. アリマー (Alim-a, 阿力瑪) 内モンゴル師範大学修士研究生「新世紀 (2000～2016年) のモンゴル文学研究の統計学的研究」

3分科会終了後、6時30分から第1分科会の会場で閉会式が開催された。グライ副教授が司会を担当し、第1分科会をスヘ教授が、第2分科会を陳崗龍 (ドラーン) 教授が、第3分科会をハイルハン教授がそれぞれ総括し、最後に内モンゴル師範大学モンゴル学学院党書記の白宝成 (Bai Bao-cheng) 副研究員が全体を総括して閉会の辞を述べ、式は終了した。終了後、博曼海航大酒店のレストランで懇親会が催され、9時ごろに散会した。

国際学術会議「戦後モンゴル日本関係における民間外交の果たした役割：過去、現在、未来」
Role of Grassroots Diplomacy in Post-war Mongolian-Japanese Relations: Past, Present and Future

田 淵 陽 子 (東北学院大学)

TABUCHI Yoko (Tohoku Gakuin University)

本会議 (モンゴル語では “Дайны дараах Монол-Японы харилцаан дахь ардын дипломат бодлогын үүрэг: Өнгөрсөн, одоо, ирээдүй”) は、2019年8月19日、モンゴル国立大学 (ウランバートル市) 第一号館320号ホールにおいて開催された。主催は「モンゴル日本研究学会」(Монголын Япон Судлалын Нийгэмлэг) で、日本の「国際交流基金」の助成を受けて開催されたものである。会議翌日の20日は、トゥブ・アイマグのツォンジン・ボルドグにある、チンギス・ハーン騎馬像のテーマパークヘエクスカーションの予定であったが、天候悪化の予報のため、急遽会議前日の18日に前倒して実施された。

本稿では、19日の会議概要を紹介する。まず主催者代表 Ts.バトバヤル氏 (Ts.Batbayar Sc.D, モンゴル日本研究学会会長、外務省顧問) が開会の辞を述べたあと、在モンゴル日本大使館より林伸一郎参事官が挨拶の言葉を述べた。報告要旨の小冊子 (モンゴル語、一部英語) が配布され、会議は定刻どおりに進められた。会議の進行は、一部のロシア語報告を除き、すべてモンゴル語で行われた。プログラムには17名の報告者が記載されていたが、実際には15名が報告した。以下、当日の進行に基づき、報告者及び所属、報告タイトルの和訳を記す (敬称省略)。

S.Khurelbaatar (元大使・モンゴル日本関係促進協会代表)

「モンゴル日本友好運動の始まり・発展・目標」

二木博史 (東京外国語大学)

「モンゴル日本関係における日本人学者の貢献—坂本是忠を例に」

S.Demberel (モンゴル日本関係促進協会)

「モンゴル日本の文化交流：民間外交の役割」

窪田新一 (大正大学)

「日本モンゴル協会が1960～1990年に果たした貢献と今後の可能性」

Yu.V.Kuzumin (イルクーツク・バイガル国立大学)

「1939年ハルハ河戦争と独ソ不可侵条約」

O.Batsaikhan (科学アカデミー国際関係研究所)

「モンゴル・日本関係の架け橋となった花田氏」

B.Serjav (科学アカデミー国際関係研究所)

「モンゴル人民共和国平和代表団が両国関係の発端として果たした役割」

徐占江 (ノモンハン戦争研究所所長)、呉香花、呂通強

「中華人民共和国におけるノモンハン戦争研究の歴史と現状」

T.Munkhtsetseg (モンゴル国立大学、アジア研究部教授)

「Ts.Damdinsuren 著『日本訪問道中記』にみる当時のモンゴル・日本関係」

Ts.Batbayar (外務省、モンゴル日本研究学会代表)

「民間外交の実例：春日氏・中田氏らとの友好関係三十年史」

田淵陽子 (東北学院大学)

「海外戦没者の遺骨収集と日本モンゴル関係」

Ts.Purevsuren (モンゴル民族大学)

「民間外交の一形態としてのNGO」

B.A.Rodionov (ブリヤート国立大学)

「バトトルガ大統領の第三隣国政策」

金泉 (内モンゴル師範大学)

「1950年代における中蒙関係」

T.B.Badmastirenov (ブリヤート国立大学)

「中華人民共和国のソフトパワー：対外政策における教育戦略」

周知の通り、2019年は、第二次世界大戦の「始点」とも言われるノモンハン事件（ハルハ河戦争）から80年目という節目の年であった。しかし、主催者のTs.バットバイアル氏曰く、本会議の主旨は「戦史」や「国際政治」を取り上げるのではなく、モンゴル人民共和国と日本の「対立」関係から「友好」関係へと導いた、民間外交(或いは草の根外交)の果たした役割を正面から取り上げることにあった。ここでいう民間外交とは、モンゴル人民共和国と日本の正式な国交が樹立された、1972年2月以前・以後において、様々なレベルで進められた非公式な外交交渉や民間交流を指す。2019年に各国で企画された数々のノモンハンに関する国際会議と比して、ノモンハン以降の民間外交に光を当てたという意味で、本会議は他の会議とは一線を画していたと言える。

Ts.バットバイアル氏は、1989年（ノモンハンから50年目）に、戦場となったノモンハン・ハルハ河へ、モンゴル、ソ連、そして日本の三カ国の代表団が派遣されたこと、そこにご自身も参加した思い出を報告のなかで述べられた。それは、ノモンハン・ハルハ河の戦地跡という場所において民間外交が実現した、歴史的出来事であったと言える。また、S.フレルバートル (S.Khurelbaatar) 氏は、両国関係を第四段階（第一期：1950年代末～1960年初頭、第二期：1961年～1972年、第三期：1972年～1990年、第四期：1990年～現在）に区分し、その関係史を総括した。その他のモンゴル国側の報告では、国交樹立に関わった外務省の花田磨公氏（元駐モンゴル大使）や、1957年に原水爆禁止世界大会出席のため日本を訪問した学者Ts.ダムディンスレン氏のほか、民間交流を担ったモンゴル人や日本人について多くの人名が挙げられた。日本からは、二木博史氏が、戦後日本のモンゴル研究を牽引し、Ts.ダムディンスレンらと交流を深めてきた坂本是忠（第五代東京外国語大学学長）に関する報告を、窪田新一氏は、1964年の東京オリンピック開催年に創立された日本モンゴル協会の活動史に関する報告を、筆者は日本人海外戦没者の遺骨収集事業と、長谷川峻率いる「墓参団」の1966年モンゴル初訪問の歴史的意義について報告した。他方、中国側出席者の報告は、ノモンハンに関わる中国側の研究動向の紹介と、1950年代の中国・モンゴル関係史研究に関する報告であった。ロシア側出席者の報告は、ノモンハン・ハルハ河をめぐる東アジア国際関係、モンゴル国の政治問題や中国の対外政策など多岐にわたる報告内容であった。全体総括では、例えば、筆者の報告した「遺

骨」や「墓参団」をめぐる交渉過程については、モンゴル人と日本人の遺骨や墓に対する習慣が異なること、すなわち文化的相違についても指摘があった。そのほか、ノモンハン・ハルハ河における1939年の歴史的な事件を「戦争」か「事件」か「戦い」なのか、研究者によって言い方が異なる現状について議論されたり、「史実」と「創作作品」の曖昧な関係が指摘されたりした。

2019年のモンゴル国では、プーチン大統領の公式訪問をはじめとして、国立博物館での特別展示、軍楽隊の演奏会、国防省主催のシンポジウム、ハルハゴル・ソムでの軍事パレードなど、8月末から9月初頭にかけて様々な記念行事が行われた。ロシア・モンゴルの兄弟的友好関係のアピールとハルハ河の歴史的勝利が大きく報道されていた最中に、民間外交をメインテーマとする本会議が催され、モンゴル・ロシア・中国・日本の研究者が集い、民間外交史の道程を再認識し交流を深めたことは、大変意義あることであったと思う。会議から夕食のレセプションに至るまで、モンゴル語、ロシア語、中国語、英語が飛び交うなか、バトバヤル氏はホスト役、通訳、進行役として対応されていた。会議開催に尽力されたバトバヤル氏と、モンゴル日本研究学会事務局長のザグドツェテム女史に、この場を借りて謝意を表したい。なお2019年に本会議の報告集が出版された。

国際会議「世界の図書館に所蔵されている手書きのモンゴル資料とその研究」
International Conference on “Collection and Research of Mongolian Manuscripts in International Libraries”

二木博史(東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2019年8月22日と23日の両日、手書きのモンゴル関係資料の紹介・研究の国際会議(モンゴル語では、Дэлхийн номын сангууд дахь монгол сурвалж бичгийн өв)がオランバートルで開催された。昨年8月にひらかれた国際会議「世界のモンゴル資料の遺産」につづく2回めの会議である(前回の会議の内容については、『日本モンゴル学会紀要』第49号, 2019, pp. 89-91参照)。

主催はモンゴル国立大学の科学学院(Шинжлэх ухааны сургууль)、同大学モンゴル研究所、同大学図書館、モンゴル国立図書館であった。モンゴル国立大科学学院の学院長とモンゴル研究所の所長をかねるD.ザヤーバートル教授が会議を組織した。モンゴル、ロシア、中国、日本、ドイツ、ポーランドの研究者が参加した。

それぞれの国、機関における資料の所蔵状況を紹介する発表と、個別のテーマの発表におおよそ分類しうが、全体的に質のたかい発表がおおかった。

8月22日の開会式では、D.ザヤーバートル氏がおもな参加者を紹介し、モンゴル国立大学学長Ya.トゥムルバートル、教育文化科学スポーツ省のイノベーション局長D.オドゲレル、科学技術基金の総裁M.トンガラグがあいさつをした。

午前の最初のセッション(司会:アカデミー会員D.トゥムルトゴー)では4名が発表した。最初のR.オトゴンバートル(科学アカデミー言語文学研究所)「北京木版本の手書きの目録について」は、北京の嵩祝寺(Songzhusi)で印刷された木版本の目録とおもわれる手書きの資料(*Pi can [sic] gi chos kyi par dkar chag chos rje gsung 'bum grangs so gzhugs so*, 発表者所蔵)の紹介。133種類のタイトルには、チベット語の書籍のタイトルのほか、モンゴル語の書籍のチベット語訳タイトルもふくまれるという。つぎの二木博史「ある個人コレクションに所蔵されている民間信仰テキストについて」は、発表者自身が所蔵する450点以上の、モンゴル語でсан тахилгаとよばれるジャンルの経典のおもな種類を紹介し、そのなかにふくまれるモンゴル語、チベット語のツァガーン・ウブゲン経の主要なテキストについてのべ、さらにツァガーン・ウブゲン(チベット語で*Rgan po dkar po*)信仰が17世紀にアムド地方で成立しモンゴル地域にひろまった可能性に言及した。A.D.ツェンディーナ(ロシア、人文大学)「オランバートルのアカデミー会員Ts.ダムディンスレン記念館所蔵のコレクションについて」は、昨年2冊の目録(モンゴル語書籍、チベット語書籍)が刊行されたダムディンスレン教授収集の書籍の紹介。

コーヒープレイクのあとのセッション(司会:二木博史)では、3名が報告した。最初の栗林均(東北大学)「日本の東洋文庫に所蔵される*Manju mongyol kitad ügen-ü qabsuraysan toli bičig*という書籍について」は、東洋文庫のモンゴル語・マンジュ語文献目録に未収録で、かつ世界の他の機関の所蔵も確認されない刊本の紹介。収録された語彙を同時期の他の諸辞書の語彙と比較した結果、『音漢清文鑑』(1735年)の語彙とかなり一致するので、同書を利用した可能性があるとし、また同辞書は未

完成のまま試用本として刊行されたのかもしれないとのべた。つぎのセチェンビリグ (内モンゴル図書館)「中国に所蔵されるふるいモンゴル資料」は、内モンゴル図書館、内モンゴル師範大学図書館、内モンゴル社会科学院図書館、あるいは個人のコレクションに所蔵される資料を紹介するとともに、北京版ガンジョールと写本ガンジュールのテキストのちがいがおおいことを強調した。

午後の第1セッション (司会: A.D. ツェンディーナ) では4名が報告した。最初のライサ・ボドガイチェンコ (国立イルクーツク大学図書館)「V.G. ラスプーチン記念国立イルクーツク大学学術図書館所蔵のモンゴル語の刊本と写本」は、同図書館所蔵の資料の概観。つぎのD. ブルネー (モンゴル国立大学)「ダムディンスレン記念館所蔵のチベット・モンゴル語辞典について」は、同記念館所蔵のチベット・モンゴル語辞典を概観し、『賢愚経』(*Mdzangs blun*)には、4種類の *düiming* (*'dus ming*, 古語・難語辞書)があることをあきらかにした。オトゴン (西北民族大学)「谢再善 (Xie Zaishan) とかれのモンゴル研究の著作」は、『モンゴル秘史』を漢語に訳したことでしられ、西北民族大学教授もつとめた谢再善 (1903-1977) の生涯、研究活動の概観。アーラ・シゾーワ (ロシア科学アカデミー東洋文献研究所)「ロシア科学アカデミー東洋文献研究所に所蔵される元代のモンゴル語暦占書」は、カラホト文書にふくまれる冊子が『玉匣記 (*Yuxiaji*)』のふるい翻訳であることを説明した。

コーヒーブレイクのあとのセッション (司会: 栗林均) では、4名が発表した。まずノルジマ・ルブサノワ (ブリヤート共和国国立図書館)「ブリヤート共和国国立図書館所蔵の旧モンゴル文字出版物」は、同図書館所蔵のモンゴル文字による出版物の概観。つぎのB. トゥブシントウグス (モンゴル国立大学)「モンゴルにのこるマンジュ語歴史遺産 (манж бичгийн дурсгалууд)」は、アマルバヤスガラント寺院、ホブドのシャル・スム、恪靖 (Kejing) 公主陵などのマンジュ語碑文を中心とした紹介であった。オイガダイ・マンライ、サランゴア (オールドス市図書館)「オールドス市図書館所蔵の漢人経営の商店の文書」は、2012年に購入した、アルシャーの定遠營 (Dingyuanying、現在のバヤンホト)に拠点をおいた祥泰隆 (Xiangtailong) という山西商人経営の商店の文書の紹介。D.N. ブダエワ (国立ブリヤート大学)「E. Stallybrass と W. Swanの宣教活動 (1818 - 1840年)によるモンゴル語の出版物」は、イギリスから派遣された宣教師、E. Stallybrass や W. Swanによる聖書の翻訳の紹介。

ふつかめの8月23日の午前中の最初のセッション (司会: セチェンビリグ) では4名が発表した。まず Wolfgang Schmitt-Garibian (バイエルン州立図書館)「バイエルン州立図書館所蔵のモンゴル語写本」は、1980年代以降に収集された写本のなかから代表的なものを紹介した。同図書館には124点のモンゴル語の写本・木版本が所蔵されているという。コレクションの詳細なリストは以下のサイトで参照できる。

https://www.bsb-muenchen.de/fileadmin/pdf/handschriften/mongolisch_repertorium_cod_mongol.pdf

つぎのN. ソドモン (国立モスクワ教育大学)「ロシア連邦カルムイク共和国文書館に所蔵されている18世紀のカルムイクのハーン・貴族たちの往復書簡」は、カルムイク共和国文書館の фонд И-36 «Состоящий при калмыцких делах при Астраханском губернаторе»におさめられたアユーキ、ドンドウクダシ、ウバシラカルムイク・ハーンの手簡などの紹介で、当時のカルムイクの対外関係、社会、文化を研究するのにきわめて有益な資料群であることを多数の実例でしめした質のたかい報告であった。R. ビャンバー (ワルシャワ大学)「ガンダンテグチェンリン寺院図書館に所蔵されるチベット語・モンゴル語資料」は、モンゴルの学僧がチベット語で著作した作品を中心に紹介した。同氏に

よれば、チベット語で著作したモンゴル人の僧は300人以上にのぼり、ガンダン寺図書館の蔵書のなかでモンゴル語書籍は10パーセント程度をしめるという。D.ブルグド(中国社会科学院民族学人類学研究所)「ハンガリー科学アカデミー図書館所蔵のモンゴル語写本・木版本のコレクション」は、リゲティ収集の漢語・モンゴル語語彙集の紹介。

コーヒープレイク後のセッション(司会:R.オトゴンバートル)では、4名が報告した。最初のE.ブレブジャブ(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「科学アカデミー言語文学研究所所蔵の貴重な資料について」は、1950年代から1970年代に西部地方に派遣された調査隊がおおくのトド文字文献を収集したことの重要性を強調するとともに、口承文芸の膨大な録音資料についても紹介した。つぎのTs.ワンチコワ(ロシア科学アカデミー・モンゴル学仏教学チベット学研究所)「ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル学仏教学チベット学研究所の東洋写本木版本センターのコレクションの構成と内容」は、同コレクションにふくまれるモンゴル語・チベット語の文献について概説した。ヘレイド・シリ(内モンゴル大学モンゴル研究センター)「ヨーロッパの図書館に所蔵されるモンゴル語写本・木版本」は、ベルリン州立図書館とデンマーク王立図書館の蔵書の紹介。崔明德(Cui Mingde, 烟台大学)「和親文化(imperial matrimony culture)について」は、異民族に皇族の娘をとつがせる制度(和亲[hēqīn])を肯定的にとらえる内容。

午後の最初のセッション(司会:Ts.ワンチコワ)では3名が報告した。まずJ.ツェゼン(モンゴル国立文化芸術大学)「ドイツの図書館に所蔵されるモンゴル資料についての若干の情報」は、ベルリン州立図書館所蔵の写本ガンジョール(1705年)、ゲッティンゲン大学図書館所蔵資料およびGeorg Thomas von Asch寄贈の資料の紹介。つぎのO. A. ウォロジャニナ(国立ブリヤート大学)「ドルジ・バンザロフ記念国立ブリヤート大学学術図書館に所蔵されるモンゴル語木版本」は、19世紀のふるい活字本と木版本の紹介。T.バヤルラフ(モンゴル国立図書館)「モンゴル人のチベット語による著作の整理、目録化の現状」は、Asian Classics Input Project(ACIP)によるモンゴル国立図書館所蔵チベット語文献の目録化、電子化の現状について報告した。全体の約30パーセントのカタログ化がおわり、約70名のモンゴル人学僧のチベット語による著作集(*gsung 'bum*)が確認されているという。

午後の最後のセッション(司会:D.ブルネー)では4名が報告した。最初のSh.チョイマー(モンゴル国立大学)「ドレスデンのヘルンフト教会の資料館に所蔵されるトド文字の資料、経典について」は、同資料館にカルムイクで収集された32点のトド文字文献が所蔵されていることを報告。つぎのD.ムンフトゴン(科学アカデミー言語文学研究所)「科学アカデミー言語文学研究所所蔵のチベット語文献」は、同研究所にTs.ダムディンスレン旧蔵のものもふくめ、6千点以上のチベット語文献が所蔵されていることを報告した。G.ツェレン、S.ナイガルマー(モンゴル国立大学図書館)「モンゴル国立大学に所蔵されているモンゴル資料の調査」は、同大学図書館および各部署の図書館に所蔵されているモンゴル資料について概観した。最後のテレキ・クリスティナ(ハンガリー、エトヴェシュ・ロラード大学)、Ch.ガンスフ(モンゴル国立図書館)「ハンガリー科学アカデミー所蔵のモンゴルの文化遺産」は、チベット語、モンゴル語、マンジュ語の文献のコレクションを概観し、モンゴル語文献については、モンゴル国立図書館にはない39点を所蔵するとのべた。なお、テレキ・クリスティナ氏は会議には不参加であった。

会議の最後にオーガナイザーのD.ザヤーバートル教授は、来年は文書館資料をテーマに同様の国際会議をもよおすことを予告した。

第12回ウランバートル国際シンポジウム

「ハルハ河・ノモンハン戦争80周年：歴史、記憶、そして教訓」

The 12th International Symposium in Ulaanbaatar

“80 Years Since the Battle of Khalkhyn Gol / Nomonhan: The History, Memories, and Lessons”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

ハルハ河・ノモンハン戦争80周年を記念し、2019年8月29、30日の2日間にわたって、公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA) とモンゴル日本関係促進協会、日本モンゴル学会、昭和女子大学国際学部国際学科の共同主催、昭和女子大学、モンゴル日本学会、モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所、モンゴル・日本人材開発センター、モンゴルの歴史と文化研究会、NGO「バルガの遺産」協会の後援、公益財団法人守屋留学生交流協会の助成で、第12回ウランバートル国際シンポジウム「ハルハ河・ノモンハン戦争80周年：歴史、記憶、そして教訓」がモンゴル・日本人材開発センター多目的室で開催された。

開会式では、モンゴル日本関係促進協会会長・元駐日モンゴル大使S.フレルバートル (S. Khurelbaatar) が開会の辞を述べ、モンゴル国外務事務次官D.ダワースレン (D. Davaasuren)、在モンゴル日本大使高岡正人、東京外国語大学名誉教授・日本モンゴル学会会長二木博史が祝辞を述べた。

今回のシンポジウムの開催において、モンゴル日本関係促進協会会長・元駐日モンゴル大使S.フレルバートル氏は非常に熱心、かつ積極的に協力し、準備活動に携わって下さった。日本側の団体の資金が厳しい状況のなか、S.フレルバートル氏の努力のおかげで、モンゴル日本関係促進協会などの団体から支援を得ることができた。シンポジウムには、モンゴル、日本、ロシア、中国、韓国、香港などの国や地域からの100名余りの研究者が参加し、共同発表を含む、18本の報告があった。元モンゴル首相D.ソドノム (D. Sodnom) のほか、10名を超える欧米、アジア諸国でのモンゴル大使経験者がシンポジウムに参加した。

モンゴル外務省顧問・元駐キューバモンゴル大使Ts.バトバヤル (Ts. Batbayar) の報告“B.M. Молотов ба Халхын голын дайн: Зөвлөлт-Японы харилцааны хямралын үе шат (B. M. モロトフとハルハ河戦争：ソ連・日本関係における危機の段階)”は、ソ連にとって、1930年代に入ってから、日本は終始極東地域における軍事的脅威であり、モンゴルはソ連と日本との間の緩衝地帯であったこと、1937年7月に日本政府の5つの省が協議し、ハルハ河での戦いを拡大していくことを決めたこと、ヨーロッパ戦争の危機に直面する状況のなか、ソ連がアジアとヨーロッパという2つの戦場で同時に戦うことをさけるため、ハルハ河戦争をとおして、日本軍に警告したこと、モロトフ・東郷会談および9月の停戦合意によって、ソ連と日本は両国間の危機の段階を克服できたことなどを指摘した。

一橋大学名誉教授田中克彦の報告「ノモンハン戦に参加した興安騎兵隊の結末」は、ハルハ河事件とマンチュウリ会談では、バルガ人が満洲国側の主体をなしたこと、ノモンハン戦で戦ったバルガ興安騎兵隊の立場を分析するには、興安 (興安北省) 騎兵隊の指導者ウルジン・ガルマーエフの行動や第2次世界大戦後のバルガ人のモンゴルへの移住などと関連させて検討する必要があること、

などを述べた。

東京外国語大学名誉教授、日本モンゴル学会会長二木博史の報告“1930-аад оны үед Японы талын хэвлүүлсэн Халхын голын хавийн газрын зурагнуудыг ахиад авч үзэх нь (1930年代に日本がわが刊行したハルハ河周辺の地図の再検討)”は、ハルハ河戦のすこしまえに刊行された4種類の地図、すなわち『満蒙国境要図』(50万分の1、関東軍参謀部、1937年)、川瀬志郎測図『満蒙国境地帯実測図』(満洲国治安部、1937年?、未発見)、『西部國境線關係要圖』(10万分の1、関東軍司令部、1938年、20枚シリーズ)、『二十万分一外蒙タムスクスーム近傍圖』(関東軍測量隊、1938年、労農赤軍軍事測量局 [Управление военных топографов РККА] 発行地図の複製)を検討し、日本の参謀本部は満洲国とモンゴル人民共和国の国境が形成された歴史のプロセス、モンゴル・ソ連がわの国境解釈をよくしていたが、自己の管轄下にあった陸地測量部の“あやまり”をみとめようとはしなかったと結論づけた。

今日のモンゴルにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究の第一人者、駐トルコモンゴル大使R.ボルド(R. Bold)の報告“Халхын голын байлдаан: Хэрхэн эхэлсэн вэ? (ハルハ河戦争:どのように始まったのか)”は、スターリンは日本がドイツの協力なしには決してソ連に対して全面的戦争をひきおこさないと判断したため、1939年5月までには、ソ連軍はモンゴルで十分な準備をおこなわなかったこと、日本側も同様であったが、関東軍のハルハ河での挑発が次第にエスカレートするのにしたがい、危機状況に陥っていると認識したソ日両側がともに部隊を増員し、対決にいたったことを述べた。氏はまた、ハルハ河戦争をとおして、モンゴル人民共和国は領土の保全と維持に成功したのだが、この勝利に至る道筋は、現在のわれわれが考えていた以上に困難であったことを指摘し、ソ連の対モンゴル政策、とりわけハルハ河戦争で戦闘に参加したソ連の第57特別兵団(のちの第1軍集団)の活動や、ソ連内務人民委員部国家保安総局特別課からベリヤに送られた資料などが、公開されていないため、同戦争における研究は現在も継続中であり、これらの極秘資料が公刊されればハルハ河戦争史研究の完成が可能になるだろうというかんがえを表明した。

国際モンゴル学会事務局長・モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所所長、科学アカデミー会員S.チョローン(S. Chuluun)の報告“Монголын түүх судлал дахь Халхголын дайн: судалгаа, үнэлэлт, хандлага (モンゴルの歴史研究におけるハルハ河戦争:研究、評価と傾向)”は、2000年以降のモンゴルにおけるハルハ河戦争研究の成果、とりわけハルハ河・ノモンハン戦争戦勝80周年を記念して、モンゴルで出版された、モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所がその編集・出版に関わった2つの資料集“Халхын голын дайн-1939 (『ハルハ河戦争:1939』)”(モンゴル語・ロシア語・英語対照)と“Манжуурын хэлэлцээрийн өдөр тутмын тэмдэглэл, 1935-1936 он (『マンチュウリ会議日記:1935~36年』)”を紹介した。

ロシア連邦バイカル国立大学教授U.V.クズミン(U. V. Kuzmin)の報告“Война на Халхин-голе 1939 года и Советско-Германский пакт о ненападении: Вопросы историографии (1939年のハルハ河戦争と独ソ不可侵条約:史学問題)”は、ソ連・イギリス・フランス3国同盟が成立できなかった原因や、ハルハ河戦争と独ソ不可侵条約の締結との関係を焦点に検討をおこない、スターリンは、ソ連の国民の利益をよく理解し、世界の成り行きもよくわかっており、モロトフや情報入手のチャンネルを有する分析センターの協力も重要であったが、独ソ不可侵条約締結の決断を下したのはスターリン

自身だと強調した。

モンゴル国立大学教授J.オランゴア (J. Urangua) の報告“Халх голын байлдаан: төмөр зам (ハルハ河戦争：鉄道)”は、ハルハ河戦争は地政学的な、ソ連と日本の巨大な権益の対立の産物であり、同戦争における日ソ両国の戦略の策定や、戦いの行方は鉄道とも関係したことを強調し、モンゴルが東部国境の一部の領土を失ったことも鉄道と関係すると断定した。

ブリヤート国立大学准教授I. G. アユシエワ (Irina G. Aiushieva) の報告“The Normalization of Soviet-Japanese Relations after the Khalkhin-Gol Events: The Role of the Soviet-German Nonaggression Pact”は、スターリンはハルハ河での長期戦を避けるため、日本との交渉および日本の譲歩を求めたが、日本がそれに応じなかったことによって、ドイツの援助をさぐったこと、ハルハ河での戦いにおけるもっとも重要な瞬間にドイツはそのアジアでの盟友を裏切ったこと、独ソ不可侵条約の締結はハルハ河戦争における日本の戦略をかえたこと、同条約の締結および国際状況の変化によって、日本はソ連との関係正常化の道を模索せざるをえなかったことなどを指摘した。

韓国慶尙国立大学の国際地域研究院博士研究員呉美英 (Oh Mi-Young) の報告“БНМАУ ба Умард Солонгосын харилцаан дахь “Халх голын байлдаан”-ы учир холбогдол (モンゴル人民共和国と北朝鮮関係における「ハルハ河戦争」)”は、北朝鮮では、近現代北朝鮮とモンゴルとの友好的歴史をハルハ河・ノモンハンでの戦いまでさかのぼらせること、金日成将軍の率いる抗日パルチザンの日本との闘いがいかにハルハ河戦争に影響したかが称えられてきたことを述べ、たいへん興味深かった。

モンゴル諜報局特別文書館副館長B.エルデネビレグ (B. Erdenebileg) の報告は“ТЕГ-ын Тусгай архив дахь Халх голын дайны түүхэнд холбогдох баримтын судалгаа / Манжуурын хэлэлцээрийн тухай/(モンゴル諜報局特別文書館所蔵のハルハ河戦争と関係する文書の研究：マンチュウリ会議について)”はタイトル通り、同文書館所蔵のマンチュウリ会議におけるモンゴル代表の日記などの資料について紹介し、分析した。

軍事史研究者佐々木智也の報告「日本軍高級将校の文書と史料」は、日本軍の高級将校たちが私的文書、極秘文書として残した日記、証言、手記などを利用し、「第一次ノモンハン事件」が現地限りでの紛争だったのに対し、「第二次ノモンハン事件」は関東軍の最高統帥部までが認可した宣戦布告なき戦争にエスカレートしたものだだと主張した。

ドルノド大学客員研究員Ts.トゥメン (Ts. Tumen) の報告“Номун ханы дайнд оролцсон барга цэргүүдийг монгол улсад хэлмэгдүүлсэн нь (ノモンハン戦争に参戦したバルガ人部隊に対するモンゴル国における弾圧)”は、モンゴル国でおこなわれた、ノモンハン戦争に参戦したバルガ人に対する弾圧という「負の歴史」について検討した。

中国哈爾濱市社会科学院諾門罕戦争研究所徐占江、呉香花、呂通強の報告「参加諾門罕戦争偽満洲国軍初探」は、当事者の回想録および参戦者に対するインタビュー記録などに基づいて、ハルハ河・ノモンハン戦争に参戦した満洲国軍の状況、行方などについて考察した。

高知大学地域協働学部准教授湊邦生の報告“Unseen Khalkh (yn) Gol, Unseen Mongolians?: Nomonhan jiken in Japanese Mangas”は、ノモンハン事件を題材とする日本の漫画を中心に分析し、これらの漫画は、日本兵の苦難を強調しながら、関東軍指導部の無謀さを批判したこと、えがかれたモンゴルやモンゴル人にモンゴルらしさが欠けていることなどを指摘し、日本の漫画がノモンハ

ン事件/ハルハ河戦争研究に新たな光を投げかける可能性があるのではないかと展望した。

私の報告「写真・映像に見るハルハ河・ノモンハン戦争」は、近代的記録・記憶行動という視点から、日本、モンゴルの諸文書館、資料館に所蔵されるハルハ河・ノモンハン戦争のオリジナル写真・映像資料を、文字資料と突き合わせながら検証し、同戦争の記憶がいかにモンゴルとロシア（旧ソ連）、日本で表象され、記念されてきたかについて検討した。

日本地図学会の大堀和利の報告「東北アジアにおける地理学的認識——満洲・蒙古・西伯利十万分一図と東亜五十万分一図」は、東北アジアにおける地図作成の状況を概観した上で、旧日本軍により作成された「五十万分一東亜輿地図」（1928、1944年）が、東アジア・北太平洋地域の当時の最新情報が織り込まれたシリーズであり、歴史資料かつ記憶遺産だと述べた。

8月29日の夜のレセプションは、モンゴル日本関係促進協会の主催によりモンゴル外務省迎賓館でおこなわれた。宴会中、モンゴルの伝統の歌や馬頭琴の演奏、民族舞踊も披露された。8月30日の夜のレセプションは公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）と日本モンゴル学会の主催で、ウランバートルホテルでおこなわれた。

なお同シンポジウムについての記事が、現地の『ソヨンボ』紙や『オーラン・オドホン』紙などに掲載された。

国際シンポジウム「ハルハ河戦争の勝利 (1939) : 歴史の真実を探る」報告

The International Symposium “Victory in Khalkhin-Gol Battles (1939): in Search of Historical Truth”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

2019年9月26、27日、ロシア科学アカデミー東洋学研究所と昭和女子大学国際文化研究所共催の国際シンポジウム「ハルハ河戦争の勝利 (1939) : 歴史の真実を探る」がロシア科学アカデミー東洋学研究所会議室で開催された。9月26日午前中の開会式では、ロシア科学アカデミー東洋学研究所副所長A.S. ジェレズニャコフ (A.S. Zheleznyakov) が司会をつとめ、ロシア・モンゴル友好協会会長V. A. バブシキン (V.A. Babushkin)、駐ロシアモンゴル代理大使O. オチルマー (O. Ochirmaa) などが挨拶した。また、ロシア・モンゴル友好協会よりA.S. ジェレズニャコフ (A.S. Zheleznyakov)、V.V. グライヴォロンスキー (V.V. Grayvoronskiy)、N. ヒシグト (N. Khishigt)、田中克彦、下斗米伸夫、および私にハルハ河戦争80周年記念メダルが授与された。

2日間のシンポジウムで、ロシア、モンゴル、日本、中国の30名ほどの研究者が報告をおこなった。

ロシア軍事科学アカデミー・ロシア自然科学アカデミー会員、モスクワ大学教授V.P. ジモニン (V.P. Zimonin) の報告“1939 год. События в Монголии на реке Халха и их Место и роль в Системе Второй мировой войны (1939年：モンゴルのハルハ河での出来事と第二次世界大戦のシステムにおけるその役割と位置付け)”は、地政学の視点から、1939年の国際秩序を再検討し、ハルハ河戦争は第二次世界大戦の始まりであったことをあらためて強調した。

ロシア連邦軍参謀本部軍事アカデミー戦史研究所上級研究員、退役大佐A.V. シショフ (A.V. Shishov) の報告“Халхин-Гол: Необъявленная война 1939 г. (ハルハ河：1939年の宣戦布告なき戦争)”は、著名なスパイR. ゴルゲや駐日本ドイツ大使E. オットなどの情報活動も含む資料に基づいて、ハルハ河戦争を1939年の国際情勢のなかで再検討し、日独伊三国防共協定を含む複数の国際条約が存在するにも関わらず、日本が宣戦布告なしにハルハ河でソ連・モンゴル軍と戦ったのは失策であり、宣戦布告をした場合は状況が変わっただろうと指摘し、たいへん興味深かった。

ロシア連邦軍参謀本部軍事アカデミー戦史研究所副所長、中佐V.N. プリヤミツィン (V. N. Pryamitsyn) の報告“История сотрудничества СССР и Монголии в сфере гидрометеорологии в 1930-е гг. (1930年代の水文気象分野におけるソ連・モンゴルの協力の歴史)”は、1930年代、ソ連の極東地域の水文気象に関する観察は弱かったが、日本軍の脅威が次第にエスカレートしたことにより、同地域の水文気象に対する調査が求められ、ハルハ河戦争をきっかけに、ソ連は同地域における水文気象観察のシステムを構築したと指摘した。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所日本研究センター長、主任研究員エレナ・カタソノワ (Katasonova Elena) の報告“Советская и российская историография о событиях на Халхин-Голе (ハルハ河事件に関するソ連とロシアにおける歴史研究史)”は、ハルハ河戦争により、独ソ不可侵条約と日ソ不可侵条約が締結され、それによって、戦後の世界のシステムも決められたという考えをしめした。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員 K.O.サルキソフ (K.O. Sarkisov) の報告 “События на Халхин-Голе и США: Из американского архива (ハルハ河事件とアメリカ——アメリカの文書にもとづいて)” は、アメリカは、ハルハ河における日ソの軍事衝突に対してそれほど関心を持っておらず、それが大規模な戦争までに発展して行くとは思わなかったと述べ、さらにハルハ河事件の停戦協定がドイツの仲介により実現したにもかかわらず、1941年に日ソ不可侵条約が、ドイツの仲介なしに結ばれたことは、日ソがともに“アングロ・サクソン人”に対する恐怖心をもっていたことの結果だと指摘した。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員 S.L.クズミン (S.L. Kuzmin) の報告 “Халхин-гол как линия конфликтов в начале XX века (20世紀初頭の紛争の延長としてのハルハ河)” は、20世紀初頭の清政府の「新政」(バルガ [フルンボイル] に関する政策) や1928年のバルガ [フルンボイル] 人による武装蜂起などが示しているように、20世紀前半にバルガ [フルンボイル] 地域は終始各勢力が争う地域の一つであったのであり、ハルハ河事件はその紛争の延長としてひきおこされたという解釈をしめた。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任研究員 V.V.グライヴォロンスキー (V.V. Grayvoronskiy) の報告 “Новые материалы из Архивов ФСБ России о политике Японии в отношении МНР в 1922-1936-е гг. (ロシア連邦保安庁文書館所蔵の1922～36年の日本の対モンゴル人民共和国政策に関する新資料)” は、1922～36年の日本のモンゴル人民共和国に対する政策をまとめた上で、ハルハ河・ノモンハン戦争は偶発的におこった出来事ではなく、日本とソ連・モンゴルのあいだの長期間にわたる軍事対立によるものであったと述べた。

シベリア連邦大学教授 V.G.ダッツィシエン (V.G. Datsyshen) の報告 “Бои на Халхин-Голе до начала войны на Халхин-Голе (ハルハ河戦争前のハルハ河での諸戦闘)” は、1939年のハルハ河戦争は、モンゴル・満洲国国境における日ソ武装衝突の一つにすぎず、それは1935～36年のハルハ河地域におけるソ連軍と日本軍の戦いの延長線上に位置し、1939年のソ連軍は1935～36年の戦いの経験を生かしたという説を展開した。

ロシア科学アカデミーのシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究員 B.D.ツイベノフ (B.D. Tsybenov) と E.V.バトナエーフ (E.V. Batunaev) の報告 “Современная Монгольская историография Событий на реке Халхин-Гол (ハルハ河事件に関する現代モンゴルにおける歴史研究史)” は、1939年のハルハ河事件は、1936年の「ソ連・モンゴル相互援助条約」の有効性を示し、1945年の「ヤルタ条約」はモンゴルの独立を確保し、ソ連の一貫した立場を維持したと述べた。

モンゴル学・チベット学・仏教学研究員の准教授、主任研究員 D.D.バダラエフ (D.D. Badaraev) と V.G.ザルサノヴァ (V.G. Zalsanova) の報告 “Халхин-гол глазами студенческой молодёжи: По материалам социологического исследования (学生という若者の目でみたハルハ河：社会学的研究の資料に基づいて)” は、ハルハ河戦役についての、ロシアの大学生に対するアンケート調査の結果を紹介し、歴史と愛国主義教育における方向性について検討した。

内モンゴル大学教授 Чойралжав (Choyiraljav) の報告 “Nomon Qan-u Dayin-u tuqai Manju Ulus-un Uqayuly-a (ノモンハン戦争についての満洲国のプロパガンダ)” は、『盛京時報』を中心に、ハルハ河・ノモンハン戦争についての満洲国のプロパガンダを検討し、こうしたプロパガンダは日

本のコントロールをうけざるをえなかったものの、ある程度の「独自性」を維持できたと指摘した。

モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究所主任研究員N.ヒシグト (N. Khishigt) の報告“Переговоры военных комиссий Советско-Монгольских и Японо-Маньчжурских войск (ソ連=モンゴル軍・日満軍軍事委員会 [国境画定委員会] の交渉について)”は、ロシア語・モンゴル語の資料に基づいて、ハルハ河・ノモンハン戦争停戦後の、国境画定をめぐるソ連・モンゴルと日本・満洲国の交渉について検討し、モンゴルが一部の領土をうしなったことを、あらためて強調した。

私の報告「ハルハ河・ノモンハン戦争の捕虜に関する新史料」は、モンゴル国、台湾の公文書館に所蔵されている資料に基づいて、1939年のハルハ河・ノモンハン戦争の日本軍捕虜の状況と行方について再検討した。

日本からは、一橋大学名誉教授田中克彦、法政大学名誉教授・神奈川大学特別招聘教授下斗米伸夫、国文学研究資料館准教授加藤聖文、防衛省防衛研究所戦史研究センター主任研究官花田智之、岩手大学准教授麻田雅文等も報告をおこなったが、報告の原稿や要旨がないため、ここでは省略する。

本シンポジウムの成果をまとめた論文集は2020年3月に日本で刊行される予定である。

「一帯一路」沿線国家モンゴル語文献研究国際学術会議
International Conference on Classical Mongolian Texts of the Countries
Along the Line of “One Belt One Road”

フフバートル (昭和女子大学)

Borjigin HUHBATOR (Showa Women's University)

2019年11月2-3日に北京の中央民族大学で行われた「一帯一路沿線国家モンゴル語文献研究国際学術会議」は事実上、2017年11月に行われた「中央民族大学第2回モンゴル語文献研究国際シンポジウム」(『日本モンゴル学会紀要』第48号、2018年、104-114頁)に続く「第3回モンゴル語文献研究国際シンポジウム」であると同時に、ヒシグトグトフ(賀希格陶克陶)中央民族大学教授生誕80周年記念学術会議でもあった。

2日午前中の開会式は中国語とモンゴル語で行われた。まず「貴賓紹介」として、開会式出席の中央民族大学上層部のメンバーをはじめ、後援者等の関係者、海外からの参加者が紹介された。次いで同大学のSong Min副学長が歓迎の辞を、国際モンゴル学会事務局長・モンゴル科学アカデミー会員のS.チョローンが祝辞を述べた。それに続き、ヒシグトグトフ教授生誕80周年記念式典が始まり、まず、同大学中国少数民族言語文学学院常務副書記のゲレルトをはじめ、内モンゴル大学元副学長・モンゴル研究センター主任のチメドルジ教授、ヒシグトグトフ教授の出身地であるヘシグテン旗モンゴル民族中学のアルタンボラグ校長、国際モンゴル学会事務局長・モンゴル科学アカデミー会員のS.チョローン、ウランバートル大学のD.ツェデブ教授、内モンゴル大学モンゴル学学院副院長のエルデニハド教授がそれぞれ公的に祝福の辞を述べたほか、国際モンゴル学会会長BIRTALAN Ágnes、モンゴル科学アカデミー会員D.トゥムルトゴー、モンゴル科学アカデミー会員D.ツェレンソドノム、モンゴル国立大学教授Sh.チョイマーなどがヒシグトグトフ教授に対する私的な思い出や祝福のこトバを述べた。

次に、午前中のもう一つのイベントとして、「モンゴル語文献写真印刷シリーズと研究叢書出版の祝典」が行われ、ミャンガド・エルテムト総編『イリ河流域地帯所蔵トド文字文献集』と『一帯一路沿線国家所蔵モンゴル語文献写真印刷シリーズ——世界に分布するモンゴル語典籍』、『一帯一路沿線国家所蔵モンゴル語文献研究叢書』が披露され、その編集と出版の経緯等について、関係者から紹介と祝福のあいさつがあった。

午後から各セッションの研究発表が行われた。セッションは特に分野の名称によって分かれたものではなかったが、発表者の専門や発表の内容から大まかに、第1セッションが「文献研究」、第2セッションが「言語研究」、第3セッションが「文学研究」とみることができよう。プログラムに発表者の所属や職位が記されていないため、ここでもその通りに記述する。

第1セッション

11月2日午後 司会：S.チョローン、コメンテーター：Na.スフバートル

Agata Bareja-Starzyńska「ワルシャワ大学に所蔵されているモンゴル語写本について」

中見立夫「日本最初のモンゴル研究者石浜純太郎及びそのモンゴル語文献研究とコレクションについて」

ハスバガナ「チベット文書館所蔵方形文字辰年令転写年代考」

ハンチュンシェン「最近阜新県モンゴル語文事務所から遼寧省モンゴル医学博物館に移転所蔵された文献概要」

ハスチョロー「トゥメドのアルタン・ハーンとダフロン・ガジョード16世シレート・ゴンガーラシの面会」

司会：Agata Bareja-Starzyńska、コメンテーター：トゥブシントウグス

V.L.Uspenskii「モンゴル民族の古来の先祖についてゴンボジャブ・ゲンが書いたこと」

E.ジグメドドルジ「満洲清朝よりオイラドの領主の妃たちに授与した諸文書」

Ondřej Srba「“Iledkel šastir” に記録されていない領主たち——アルタイ・オリヤンハイのいくつかの旗のザサグ領主たちの世襲の歴史に関する満洲語の研究」

セチェンバートル「“Dörben bičig” の満洲語とモンゴル語の諸文献の比較研究」

11月3日午前 司会：V.L.Uspenskii、コメンテーター：Agata Bareja-Starzyńska

BIRTALAN Ágnes「ハンガリー科学アカデミー図書館東洋コレクションにあるトド文字文献とその意義」

Na. スフバートル「新しく発見されたトド文字の“Gegen-ü namtar orusibai” という文献について」

トゥブシントウグス「トド文字木版の木材——古い発見、新しい研究」

孔令偉「チャハル・ゲブシの“Ögeled qad-un üy-e süljil” についての考察」

司会：アルタンガラグ、コメンテーター：ホシヨード・ツェンゲル

ダムディンスレン・ドルマー (Anna Tsendina) 「“Sir-a tuyuji” について」

バスジンゴア・N.ホルツビレグ「“Čindamani-yin sang” にかかわる若干の問題に対して」

Rákos Attila「モンゴル文字文献におけるトド文字の影響——ハンガリー科学アカデミー図書館東洋コレクションにおける諸写本を例に」

ツォグトナラン「『モンゴル秘史』が明朝時代の歴史文献と書籍目録に記された状況」

司会：BIRTALAN Ágnes、コメンテーター：ジグメドドルジ

A. ションホル「“Badm-a yadang sudur” (写本) の総合的研究」

ホシヨード・ツェンゲル「新発見ヘシグテン旗ゾーヒーモンゴル岩刻文字の初歩的研究」

ミャンガト・エルデムト「トド文字両面石文献7a頁の復刻」

ゴア「蓮華浄土実勝寺のモンゴル語碑文及びそれに関連する諸問題」

司会：ダムディンスレン・ドルマー、コメンテーター：ションホル

S. セチェンビレグ「ブリヤートのモンゴル語写本『ガンジョール』について」

Ü. トヤー「モンゴル語金字『ガンジョール』のあとがきについての考察」

ツォルモンゲレル「北京版朱墨『ガンジョール』及びオイラドのザヤ・バンディタ・ナムハイジャムツの翻訳」

第2セッション

- 11月2日午後 司会：Ts.サインザヤー、コメンテーター：セチェンツォグト
- Go.ゾリグト「『内モンゴルにおけるモンゴル語方言地図調査資料叢書』について」
- L.ホルツバートル「7世紀の『モンゴル祖語』の構造について」
- E.ジャルガルマー「文献の単語をモンゴル諸語の資料から考察すること——samšiqu という語を例に」
- フフ「音声学における空間分布図の類似度によりアルタイ諸語の親縁関係について論じる」
- ジンガン「仏教文献における『単角神』物語」
- Ts.サインザヤー「甘粛と青海の孤立したモンゴル諸語」
- 司会：フフ、コメンテーター：Go.ゾリグト
- セチェンツォグト「『モンゴル秘史』のjunda-ul (准答兀勒) とモンゴル諸語におけるその音韻と意味の対応」
- ブレンバト「『モンゴル秘史』の漢字転写における異なる転写による同一語リスト及びその要因についての判断」
- ブルグド「『至元譯語』諸版の比較研究」
- サインバヤル「モンゴル語一人称代名詞nam-a と nadaの音韻変化の解釈」
- Mu. ジャブフラン「『モンゴル秘史』転写漢字リスト」
- トゥムルゴルト「『モンゴル秘史』の「倒兀、擣兀、荅兀」の語意についての研究」
- 11月3日 司会：ダブホルバヤル、コメンテーター：セチェンバト
- D.トゥムルトゴー「『モンゴル秘史』の三つの異なる原本について」
- ハスエルデニ「8種類の文字合璧辞書『ムカディマツ・アル・アダブ』とそのモンゴル語の特徴」
- ソドバートル「モンゴル語対聯“Aliba düizi-yin bičig”」
- Čün quwa「清朝時代のモンゴル文字公印について」
- 司会：L.ホルツバートル、コメンテーター：フフバートル
- サロールエルデニ「現代モンゴル語文法範疇における新しい傾向——ハルハ方言を例に」
- ダブホルバヤル「言語データに基づくモンゴル語辞書編集問題」
- 李宝文「モンゴル文章語におけるiの五つの形式の問題について」
- バヤンサン「“bi öber-iyen, busud kümün” というコンセプトの相互関係とその特徴」
- 司会：サロールエルデニ、コメンテーター：ソドバートル
- フフバートル「ケンブリッジ大学所蔵“Yeke köke tuy” (『大青旗』) 数号とモンゴル人作家たちの作品」
- セチェンバト「“Monggo ubaliyambuha tanggū meyen” (蒙古翻譯一百条) について」
- オロルマージャブ「“Ĵegünĵar-i tübsidkeĵü toytaĵsan daray-a anu ili ĵajar-tu temdeglen bayiyuluĵsan gereltü kösiy-e čilayu-yin bičig” のトド文字転写と解釈及び関連する歴史上のでき事」
- ギーグチ「清朝時代の北京における寺院のモンゴル語碑文概要」
- 司会：李宝文、コメンテーター：ブルグド
- ソヨルマー「ワギンダラ文字字法解説」
- ボー・マンリヤン「モンゴル語のlaの語意考察」

ショーチュン「満洲、モンゴル、西夏、嘉戎、ウイグル五言語辞書の研究」

第3セッション

11月2日午後 司会：ツォグト、コメンテーター：ドラーン

ドルノテンゲル「研究分野の規範化と資料収集——モンゴル文学研究分野史のデータベースを事例にして」

S. バイガルサイハン「チョイロブ・ヒシグトグトフと古典文学研究」

エルデニハド「新発見のモンゴル文学理論 (文論) 資料——民国時代の数編のモンゴル語序文」

セチェンダンジン「トド文字版“Saran köküge-yin tuyuǰi”研究」

サルナー「大詩人Na. サインチョグトの新しい民謡となった詩について」

司会：バイガルサイハン、コメンテーター：エルデニハド

D. タヤー「18世紀におけるカルムイクのゲセルに関わるある手紙文の研究」

ワンメイホア「明清時代のモンゴル歴史文献とその価値について」

バーボー「ジェブツンダンバ・ホトクトの伝記について」

イントール「“Qoyaduyar ilayuyusan nom-un qayan boyda Tsüngkaba-yin tuyuǰi orusiba”の著者についての考察」

ソミヤー「中華人民共和国仏教寺院規定更新についての考察」

司会：ドルノテンゲル、コメンテーター：D. タヤー

D. ツェレンソドノム「モンゴルと中国の伝説や叙事詩に登場する狐のおばけに関する話」

D. ツェデブ「潜在意識の一つの現われとしてのモンゴル語文献——夢についての書籍とそれを研究する意義」

シューリン「ショワーマル・バンディタ・ゲンデンダンジンジャムツと彼に関連する文献について」

ナラス「モンゴル史の記述史と文献教育の関係について」

ワンフーチン「ラマ旗にアンダイ踊りが広がった伝説と現状」

司会：ワンメイホア、コメンテーター：シューリン

ドラーン「ハスポーの“Sin-e orčiyulju čuqulun yaryaysan qung lêu mêng bičig-ün üjekü ary-a”の写本の比較研究」

ツォグト「ロブサン・ホールチが語る“Bodi mergen qayan”という物語の言語的な特徴についての研究」

アヤルゴーン「ヒーモリの柱を建てる風習について」

ウヌル「ゴルジーン・スム寺について」

司会：ウエンイン、コメンテーター：サランゲレル

Gê. ナムジル「Ch. ヒシグトグトフ教授の学術研究の態度と方法について」

ボヤンバートル「B. ボヤンチョールガンの履歴と外モンゴルに行った時期の状況」

ウルズイー「中国のモンゴル研究におけるチベット語文献研究概論」

ノゴーンタル「シムナー・ケンジと“Mongyul jakiy-a bičig-ün udq-a-yi songyuysan bičig”についての初歩的研究」

司会：Gê.ナムジル、コメンテーター：ボヤンバートル
ウェンイン「韻の翻訳の視点におけるジャンガル翻訳の補足」
サランゲレル「『モンゴル秘史』におけるある習慣的記号及びその情報価値」
ハストンガラグ「『モンゴル秘史』における服装と飾りの風習」。

基調講演 司会：ジャハダイ・チメドルジ
井上治「オロン・スム遺跡で発見されたモンゴル語文献の日本における研究の最近の状況」
Ch.ヒシグトグトフ「モンゴル高原における古代アルタイ祖語諸民族の文献研究に関するいくつかの問題について」

閉会式 司会：ボルジギン・チョロー
第1セッションのまとめ：モンゴル国立教育大学教授Na.スフバートル
第2セッションのまとめ：中国社会科学院研究員ソドバートル
第3セッションのまとめ：北京大学教授ドラーン
国際モンゴル学会からの謝辞：ハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学教授・国際モンゴル学
会会長BIRTALAN Ágnes
謝辞：中央民族大学中国少数民族言語文学学院教授ミャンガド・エルテムト

国際モンゴル学会・第3回アジア大会 (ソウル)
「モンゴルの遺産と文化：考古遺物と文字遺物」

The 3rd Asian Conference (Seoul) 2019. The International Association for Mongol Studies.
“Heritage and Culture of the Mongols: Archaeological and Literary Monuments”

松川 節 (大谷大学)・井上 治 (島根県立大学)・笹田 朋孝 (愛媛大学)
MATSUKAWA Takashi (Otani University), INOUE Osamu (The University of Shimane),
SASADA Tomotaka (Ehime University)

2019年11月8日～9日、大韓民国ソウル市の韓国国立中央博物館において、国際モンゴル学会・第3回アジア会議 (ソウル) が、「モンゴルの遺産と文化：考古遺物と文字遺物」をテーマにして、韓国中央アジア学会と国際モンゴル学会の共催で開催された。会議運営機関は、韓国国立中央博物館、韓国文化財庁国立文化財研究所、韓国国立アジア文化殿堂、在韓国ユネスコ・アジア太平洋無形遺産センター、韓国外国語大学校モンゴル語学科、高麗文化財研究院、国際モンゴル学会、韓国中央アジア学会で、後援機関は、モンゴル国教育文化科学スポーツ省、駐韓国・モンゴル大使館、韓国研究財団、東北アジア歴史財団、韓国高等教育財団、韓国企業銀行、韓国モンゴル学会、漢江文化財研究所、セブンデーツアー会社であった。

国際モンゴル学会は、モンゴル国ウランバートル市にてほぼ5年に一回開催される定例大会のほか、今までヨーロッパで3回、アジアで2回の「分大会」を組織してきた。このうちアジアでは2017年の北京、2018年の東京に続く3回目の開催になる。今回の会議参加・報告者の大部分は韓国の研究者で、中でも博物館学・考古学関係者が多数を占めていた。モンゴル国からは研究者とともに多くの官僚が参加していたのが印象的であった。中国籍の参加者は、韓国滞在中の研究者・留学生だけであった。その他、ロシア、アメリカ、イギリス、チェコ、ポーランド、日本からの研究者が参加・報告した。会議参加者には韓国語・英語・モンゴル語によるプログラム冊子とともに、A4判604頁という巨冊の予稿集が配布された。全ての予稿は、韓国語と、英語かモンゴル語という対訳形式にされていた。

11月8日10:00より韓国国立中央博物館の教育館小講堂にて、C. Чулуун Чоорон (国際モンゴル学会事務局長) の司会で開会が宣言され、X. Баттулга バトトルガ・モンゴル国大統領の祝辞がX. Мандахцэцэг マンダフツェツェグ (モンゴル国対外関係省対外宣伝・文化関係局長) によって代読され、続いてД. Рэгдэл レグデル (モンゴル科学アカデミー総裁) が祝辞を述べた。さらに、BAE, Ki-dong (韓国国立中央博物館館長)、CHUNG, Jae-suk (韓国文化財庁長)、Н. Эрдэнэтуяа エルデネトヤア (駐韓国モンゴル大使代行) が挨拶した。LEE, Pyung-rae (国際モンゴル学会・第3回アジア大会 (ソウル) 準備委員長) は遅参して昼食時に挨拶した。続いて韓国外国語大学校モンゴル語学科の学生によるモンゴル民族衣装ファッションショーが開催され、会場は和やかな雰囲気包まれた。

休憩後、11:00より基調講演2本がなされた。

◆KIM, Ho-dong (韓国国立ソウル大学校) “The institution of Envoys and Inter-ulus Diplomacy in the

Mongol Empire.”

- ◆ Birtalan Ágnes (国際モンゴル学会会長；ハンガリー、エトヴェシ・ロラード大学) “Hungarian Oral Narratives (Hung. népmonda) about the Mongolian Campaign (1241-1242)”

11:50より昼食休憩となり、博物館内のレストランにて韓国中央アジア学会の接待による昼食会が開催された。

14:00より午後の部が3つの分科会(セッション1, 2, 3)に分かれて開催された。

セッション1は午前と同じく小講堂において、学術報告と映像上映が行われた。

第1部はSHIM, Jae Seok (韓国国立扶余博物館)の司会で“The Significant outcomes related to Mongolian Cultural Heritage Projects Managed by the Institutions in republic of Korea”をテーマに3本の報告がなされた。報告に先立ち、LEE, Jinsik (国立アジア文化殿堂長代行)とKEUM, Gi Hyung (ユネスコ・アジア太平洋無形遺産センター事務総長)が挨拶した。

- ◆ PARK, Weon-mo (ユネスコ・アジア太平洋無形遺産センター) “Archevement and Meaning of ICHCAP’s ICH Safeguarding Projects for Mongolia.”

- ◆ SHIM, Hyo-yoon, JEON, Bong-su (韓国国立アジア文化殿堂) “Central Asia Projects and some visions for New Mongolia Projects of Asian Culture Center.”

- ◆ HWANG, Ji-hae (韓国国立文化財研究所) “Mongolian Folklore & Cultural Legal System Practice Managed by NRICH.”

第2部はJUNG, Min Young (ユネスコ・アジア太平洋無形遺産センター)の司会で“Screening Session: Mongolian Heritage Documentary Films”と題して以下の4本が上映された。

- ◆ “Secret of Hair’s Melody.” (27分)
- ◆ “Mongol Khuumei Today.” (38分)
- ◆ “Traditional Games with Anklebones.” (35分)
- ◆ “Traditional Mongolian Practices of Worshipping Sacred Sites.” (27分)

セッション2は教育館の教室1において、Cultural Property Policy and Research をテーマに計9本の学術報告が行われた。

第1部は JEONG, Seongmok (韓国国立文化財研究所)の司会で3本の報告がなされた。報告に先立ち、CHOI, Jong-Deok (韓国国立文化財研究所長)とГ. ЭРЭГЗЭН エレグゼン (モンゴル科学アカデミー考古研究所所長)が挨拶した。

- ◆ Д. Одргэрэл オドゲレル (モンゴル国教育文化科学スポーツ省) “Policy on the Cultural Heritage of Mongolian Government.”

- ◆ LEE, Su Jeong (韓国文化財庁) “Recent development and challenges of korean heritage policy.”

- ◆ Д. Баттогтох バトトグトフ、Г. Оюунцэцэг オヨーンツェツェグ (モンゴル国教育文化科学スポーツ省) “Mongolian government’s policy of promoting Mongolian studies.”

第2部はHWANG, Ji hae (韓国国立文化財研究所)の司会で3本の報告がなされた。

- ◆ HONG, EunKi (韓国国立文化財研究所) “Mongolian temple architecture survey results and architectural features.”

- ◆ Б. Мөнхцэцэг ムンフツェツェグ (モンゴル国立文化芸術大学)、О. Ангарасүрэн アンガラグスレ

ン (京都大学)、LEE, Jae Sung (韓国国立文化財研究所) “The Meaning of Material Research and Restoration Results of excavation in No.69 in Chandman Harr.”

- ◆ JEONG, Seongmok (韓国国立文化財研究所) “Excavation investigation results of the Shiveet Khairkhan Ancient Tombs in Mongolian Altai.”

第3部は JEONG, Seongmok (韓国国立文化財研究所) の司会で3本の報告がなされた。

- ◆ AN, Bo yeon (韓国国立文化財研究所) “An Introduction and Consideration of the Costume and Textiles Excavated from Shiveet Khairkhan Ancient Tombs in Mongolia.”

- ◆ Ж. Баярсайхан バヤルサイハン (モンゴル国立博物館) “Excavation of Salvation Archaeology and New Relics from the Mongolian Empire.”

- ◆ CHO, Nam chul (韓国国立公州大学校) “Current Status and Problems of Management of Excavated Relics in Mongolia.”

セッション3は教育館の教室2において、History and Literature of Mongolia I をテーマに計9本の学術報告が行われた。

第1部は YOUN, Eun-suk (韓国国立江原大学校) の司会で3本の報告がなされた。報告に先立ち、KWON, Young-pil (韓国中央アジア学会初代会長) とチョローンが挨拶した。

- ◆ KWON, Young-pil (韓国国立芸術総合大学校), “The Legacy of Xiongnu Art as an “Alternative Text”.”

- ◆ JEONG, Jaehun (韓国国立慶尚大学校) “The Value and limitations of ancient Turk inscriptions as the historical materials.”

- ◆ Д. Төмөртоогоу トゥムルトゴウ (国際モンゴル学会) “Three Different Versions of the Secret History of the Mongols.”

第2部は LEE, Ho-jung (韓国国立江陵原州大学校) の司会で3本の報告がなされた。

- ◆ Б. Хишигсүх ヒシグスフ (モンゴル国立大学) “Investigating some issues in the Secret History of the Mongols.”

- ◆ Д. Энхтуул エンフトール (モンゴル国立大学) “The Secret History of the Mongols: Terms in Russian Etymology Dictionary.”

- ◆ CHOI, Soyung (韓国国立ソウル大学校) “Putting the puzzle Together Bayan (1236-1295) and his age.”

第3部は KIM, Janggoo (韓国東国大学校) の司会で3本の報告がなされた。

- ◆ MATSUKAWA, Takashi (大谷大学) “On the reconstruction of Replica of Sino-Mongolian Inscription (1347) from Kharakhorum.”

- ◆ KIM, Seokhwan (韓国国立慶尚大学校) “Sources and Studies on Decrees in the Mongol Empire.”

- ◆ KIM, Bo-kwang (韓国嘉泉大学校) “Introduction on the Chronicle of the Yuan-Goryeo Relations.”

以上で初日の学術日程が終了し、会議参加者はバスで龍山駅近くに移動し、18:30より韓国料理レストラン Kiwa Restaurant にて国際モンゴル学会とモンゴル国教育文化科学スポーツ省主催の夕食会に参加した。

11月9日 10:00、会議2日目は3つの分科会(セッション4, 5, 6/7)に分かれて同時進行で開催された。

セッション4は教育館の教室1において、History and Literature of Mongolia II をテーマに計13本の

学術報告が行われた。

第1部は KIM, Sung Soo (韓国国立ソウル科学技術大学校) の司会で4本の報告がなされた。報告に先立ち、LEE, Pyung-rae、Górski Adam (ポーランド・在クラクフ・ポーランド科学アカデミー・ポーランド科学学術アカデミー公文書館館長)、HAN Soo (韓国国立中央博物館アジア部長)、B. Ичинхорлоо イチンホルロー (モンゴル国立図書館長) が挨拶した。

◆Б. Ичинхорлоо イチンホルロー “Literary heritages in the National Library of Mongolia that registered to the UNESCO.”

◆Bareja-Starzyńska Agata (ポーランド・ワルシャワ大学) “Treasures of Mongolian Writings in Poland.”

◆К. Орлова (ロシア科学アカデミー東洋学研究所) “Several documents on Mongolia from the Central Archive of the Federal Security service of the Russian Federation.”

◆Górski Adam “Władysław Kotwicz and his Legacy kept in the Archive of Sciences of PAS and PAAS in Cracow, Poland.”

12:00より昼食休憩となり、博物館を自由観覧し、館内レストランにてそれぞれ昼食をとり、14:00より午後の第2部が開始され、CHO Won (韓国国立プサン大学校) の司会で3本の報告がなされた。

◆LI, Yong-sông (韓国国立ソウル大学校) “New Readings of old Turkic Inscriptions in Mongolia.”

◆Д. Өлзийбат Олズийбат (韓国外国語大学校) “Correlation between the ‘y/yota’ symbol and the Hunminjeongeum of the Phags-pa alphabet.”

◆Kapišovská Veronika (チェコ・カレル大学) “Illustration to the Mongolian folk-songs drawn by Lodoi lama.”

第3部は KOH Myung Soo (韓国国立忠南大学校) の司会で3本の報告がなされた。

◆Б. Норовням Норовням (韓国檀国大学校) “Changes of female Characters in Mongolian Heroic Epic.”

◆CHOI, Yoon Jung (韓国国立慶北大学校) “Mongol domination of China & 〈至正條格〉.”

◆О. Дэмчигмаа Дэмчигмаа (モンゴル国立大学) “Mongolian translation of Subhashita Commentary.”
第4部は LI, Yong-sông の司会で3本の報告がなされた。

◆М. Эрдэмт Эрдэмт (中国・中央民族大学) “Tod Literature Summary Conserved Upstream of the Ili River.” 【欠席】

◆Н. Батболд Батболд (モンゴル中央情報局特別文書館) “Seals of noble commanders of outer Mongolian banners.”

◆KIM, Sung Soo “The Mongolian documents during the 17-18th centuries and inner Asian History.”

セッション5は教育館の教室2において、History and Literature of Mongolia III をテーマに計9本の学術報告が行われた。

第1部は SEOL, Paehwan (韓国国立全南大学校) の司会で4本の報告がなされた。報告に先立ち、CHOI, Seon Ju (韓国国立中央博物館学芸研究室長)、С. Чулуун、KIM, Ki-Sun (韓国外国語大学校) が挨拶した。

◆С. Чулуун “A Study on the Excavation of Temple Site in Northern Mongolia.”

- ◆ JOO, Kyeongmi (韓国国立全南大学校) “Iconography of the Buddhist Rock Carving in Manzushir Temple of Mongolia.”
- ◆ Т. Отгонтуул オトゴントール (モンゴル国立大学) ““Chiu Man Chou Tang” As an important Linguistic and Historical Source.”
- ◆ CHOI, Hyong Won (韓国外国語大学校) “The Mongolian version of the Bura Treaty 1727.”
12:00より昼食休憩となり、博物館を自由観覧し、館内レストランにてそれぞれ昼食をとり、14:00より午後の第2部が開始され、CHO Wonhee (韓国学中央研究院) の司会で3本の報告がなされた。
- ◆ Ж. Урангуя オランゴア (モンゴル国立大学) “Documents regarding Khaisan-gun archived in the National Archives of Mongolia.”
- ◆ LEE, Pyung-rae (韓国外国語大学校) “Mongolian Buddhism in Korean Sources during the Early Twentieth Century.”
- ◆ INOUE, Osamu (島根県立大学) “The Mongolian version of the propaganda pictorial magazine FRONT, which was published in Japan during the period of imperialism.”
第3部はJOO, Kyeongmi (韓国国立全南大学校) の司会で2本の報告がなされた。
- ◆ Р. Эрдэнэтуяа エルデネトヤア (モンゴル国立教育大学) “A comparative study of Kinship term in Mongolian, in Korean, Moanchurian language.”
- ◆ U. E. Bulag (イギリス・ケンブリッジ大学) “All Roads Do to Lead to Burkhan: Nomadic Geography and the Construction of the “Mongol Homeland.””
セッション6は教育館の小講堂において、Mongolian Archaeology をテーマに計13本の学術報告が行われた。
第1部は OH, Seiyon (韓国国立金海博物館) の司会で4本の報告がなされた。報告に先立ち、SONG, Yi-chung (韓国公立プサン博物館館長)、Д. Сүхбаатар スフバートル (モンゴル国立博物館館長)、Г. Эрэгзэн エレグゼンが挨拶した。
- ◆ Д. Сүхбаатар スフバートル “The petroglyphs site in Del Mountain, Mongolia.”
- ◆ JANG, Seogho (韓国東北アジア歴史財団) “A study of the deer images found in the petroglyphs of Uvs Aimag, Umnugovi Som, Khuren Uzhur Khadan Uul, Mongolia.”
- ◆ W. H. Honeychurch (アメリカ・イエール大学) “Where are the slab burials? Sruvey and Excavation at Delgerkhaan uul, Sukhbaatar aimag.”
- ◆ Ч. Амаргүвшин アマルトゥブシン (モンゴル科学アカデミー考古研究所) “Some issues on the Study of the Bronze Age in the Bobi and Plains of Mongolia.”
12:00より昼食休憩となり、博物館を自由観覧し、館内レストランにてそれぞれ昼食をとり、14:00より午後の第2部が開始され、LEE, Na Kyung (韓国国立中央博物館) の司会で3本の報告がなされた。
- ◆ Г. Эрэгзэн エレグゼン “The archaeological results in Goa-Dov Xionggnu site.”
- ◆ SASADA, Tomotaka (愛媛大学) “Ancient Metal Production in Mongolia with focus on Iron and Copper.”
- ◆ CHANG, Eun-jeong (韓国国立中央博物館) “The change of Xionggnu society through horse equipment

and weapons.”

第3部はYOON, Tae young (韓国国立扶余博物館)の司会で3本の報告がなされた。

- ◆OH, Jae-Jin、AHN, Jaepil (韓国中央文化財研究院)、RIM, Dongjae (東西文物研究院) “Excavation Report of Xiongun Tomb in Chikertyn zoo, Mongolia.”
- ◆LEE, Na Kyung (韓国国立中央博物館) “The result of excavation (2019) on Xiongnu Tomb No. 160 at Duurlig Nars.”
- ◆SZILÁGYI, Zsolt (ハンガリー科学アカデミー民族学研究所) “Under the Eternal Blue Sky. The Khorloo Land Landscape Archaeology in Mongolia Project.”

第4部はCHANG, Eun-jeong (韓国国立中央博物館)の司会で3本の報告がなされた。

- ◆Л. Эрдэнэболд エルデネボルド (モンゴル国立科学技術大学)、Ц. Цэрэндорж ツェレンドルジ (モンゴル国立大学) “Excavation of Chandman’s Khar Mountain, Mongol Empire about the tomb of the times.”
- ◆YUN, Hyeung-won (韓国国立扶余博物館) “The ship of Mongol Empire Shinan Shipwreck.”
- ◆HAN, SungUk (韓国民族文化遺産研究院) “The origin of Han Ping (韓瓶) and the Current Situation of Han Ping (韓瓶)excavated from South Korea.”

セッション7は教育館の教室2において、Graduate School of Mongolian Studies と銘打って、KIM, Ki-Sun (韓国外国語大学校)の司会で大学院生による計4本の学術報告が行われた。

- ◆S. Hasichaolu ハスチョロー (【中国】韓国東国大学校) “The analysis on the gender conformity of Sentence Components of the Secret History of the Mongols.”
- ◆B. A. K. Sinvany (アメリカ・ジョーンズ・ホプキンス大学・南京センター) “Notes on the Invention of the First Gun: A Narrative of Challenge and Response in the Song Warring States Period (960-1279).”
- ◆JANG, Jae-hyuk (韓国外国語大学校) “The change on the Geoeconomics identity of Mongolia in the 21st Century: From Central Asia to Northeast Asia.”
- ◆LEE Dae-hak (韓国外国語大学校) “A study of the political transition and social Changes in Mongolia – with focus on Christianity.”

以上で2日目の全ての学術日程が終了し、17:40よりセッション6が行われていた教育館の小講堂にて閉会式が開催された。その後、会議参加者はバスで龍山駅近くに移動し、18:30より韓国料理レストラン Han River Restaurantにて韓国国立中央博物館長主催の夕食会に参加した。

全ての学術報告は、韓国語と、英語かモンゴル語の同時通訳付きで行われ、報告に対する質疑応答も活発になされた。ただし、3つの部会が並行して進行していたため、残念ながら各参加者は会議全体の三分の一程度しか共有できなかった。しかし、初日と二日目の夕食会は、それぞれ、会議参加者の情報交換と親睦を深め合う良い機会となったことを付言したい。

第2回13-18世紀ユーラシア古典学国際会議兼イリンチン教授モンゴル学論著研究シンポジウム
The Second International Conference of Eurasian Classics from the 13th Century to the 18th Century and
the Launching Ceremony of the Mongolian Academic Works of Professor Y. Irinčin

二 木 博 史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2019年11月16日、17日のふつか間、北京の中国人民大学の主催、中国モンゴル史学会と国際モンゴル学会の共催で、「第2回13-18世紀ユーラシア古典学国際会議兼イリンチン教授モンゴル学論著研究シンポジウム」が、中国人民大学を会場に開催された。うえにプログラムに印刷された会議の英語の正式名称をしるしたが、漢語の正式名称「第三届13-18世纪欧亚古典学国际会议暨亦邻真先生蒙古学论著研讨会」のほうがより適切な表現であろう。『モンゴル秘史』のテキストの復元などでよく知られている著名なモンゴル史研究者、内モンゴル大学教授イリンチン (Irinčin, 1931-1999) の没後20周年にあわせて、高弟のオラーン (中国社会科学院民族学人類学研究所教授)、オヨンビリグ (中国人民大学国学院常務副院長) のふたりが組織した国際会議で、国外からはモンゴル、日本、ロシア、アメリカ、ハンガリー、チェコ、ウズベキスタンの研究者が参加した。

初日の11月16日は人民大学のイーファー (逸夫) 会議センターを会場に、午前中は開幕式、午後は基調報告がなされた。開幕式では、オラーンがイリンチン教授の生涯を紹介し、つづいて人民大学党委員会副書記 Qi Pengfei (齊鹏飞)、国際モンゴル学会会長ビルタラン・アーグネシュ、中国モンゴル史学会事務局長オヨンゲレルなどがあいさつをのべ、そのあと記念出版物刊行のテープカットがあった。記念撮影のあと、来賓のあいさつ、弟子・子女のスピーチがつづいた。来賓のなかでは、『内蒙古历史地理』(1994年)の共著者、内モンゴル大学教授 Zhou Qingshu (周清澍) の回想に注目があつまった。

午後の前半のセッションでは、5名が基調報告をおこなった。最初のオラーン「イリンチン先生のモンゴル元史の文献学のコース」は、イリンチンの講義ノートをしめしつつ、かれが当時としてはきわめて革新的な、多言語資料についてのモンゴル文献学の講義をおこなっていたことについて具体的に紹介した。つぎのバイルダグチ (Bayilduyçi, 内モンゴル大学)「早期モンゴル社会制度の再考」は、チンギス・ハーンの登場以前のモンゴル氏族社会の共同体のありかたについて再検討した。ビルタラン・アーグネシュ (エトヴェシュ・ロラード大学、ハンガリー)「Master Rogerius 著の Carmen Miserabile – モンゴル軍の侵入についての13世紀のハンガリー人のナラティヴの検討」は、バト軍の侵入に遭遇したハンガリー人の記録に反映されたハンガリー民族独特のモチーフについて研究した興味ぶかい報告だった。C.P. アトゥッド (ペンシルベニア大学)「『聖武親征録』はいかに成立したか?」は、同氏がこの数年とりにくんできた『聖武親征録』の文献学的研究の結論を整理した。アトゥッドによれば、『聖武親征録』は『チンギス・ハン紀』と『ウゲデイ・ハン紀』というべつべつのことになったスタイルの年代記が Ayurbarbada Buyantu Qa'an の時代にいっしょになった結果うまれた。姚大力 (Yao Dali, 復旦大学)「『大明混一図』にえがかれたふたつのインド」は、明代の初期にえがかれた同地図を15世紀初頭に朝鮮で作成された『混一疆理歴代国都之図』とも比較しつつ、

インドが二カ所にえがかれた背景を検討した。

コーヒーブレイクのあと、さらに4名が基調報告をおこなった。最初の森川哲雄（九州大学）「通称“アルタン・ハーン碑文”について」は、オロンスム出土の同碑文（1594年）のW.ハイシツヒによる転写、ドイツ語訳（1966年）と全榮（Quanrong）による転写（2017年）を参照しつつ、自己の転写をしめし詳細な註をほどこした。巴哈提・依加汉（Bakhyt Ezhinkanuli, 中国人民大学）「乾隆48年に高宗がカザフのハンにおくった2通のチャガタイ文の勅令」は、1783年に乾隆帝からカザフの小オルダのハンNurali、中オルダのスルタンAbulfeizにおくられた書簡を詳細に検討し、当時の清朝とカザフの関係を考察した。二本博史「東京の個人が所蔵するハスボー訳『今古奇観』の写本について」は、報告者自身が所蔵するハスボーによる『今古奇観』のモンゴル語訳（1816年）の写本（全11章）をとりあげたものである。ハスボーによる『紅樓夢』のモンゴル語訳は、『紅樓夢』の翻訳・解釈のテキストのなかでも独自の地位をしめ、イリンチンによる漢語訳でもしられているが、『今古奇観』の翻訳はそれほど注目されてこなかった。ハスボーは『今古奇観』の章名は逐語訳した一方で、本文はより自由に訳していること、とくに韻文の翻訳はモンゴル語の詩作品としてすぐれていることを指摘した。バヤルメンド（内モンゴル大学）「『アルタン・トブチ』の傍注についての考察」は、ロブサンダンザン著の『アルタン・トブチ』にふされた700カ所の註に注目し、その重要性に注意を喚起した。

ふつかめの11月17日は、人民大学国学院のふたつの会議室がつかわれた。わたしは会議室117での17名の報告のみきいたので、それらについて紹介したい。会議室122での18本の報告は省略する。

午前中の第1セッションでは3名が報告した。最初の希都日古（Siduryu, 内モンゴル大学）「『土木の変』についての考察」は、1449年に明の正統帝がオイラドのエセン・タイシの軍の捕虜になった事件の顛末を再検討し、同事件がモンゴルと明の関係史のひとつの転換点になったことをしめした。ダリジャブ（达力扎布, 中央民族大学）「清代の内ジャサグ6盟の名称がさだまった時期の考察—会盟に関する康熙41年のモンゴル語文書の翻訳と解釈」は、内ジャサグのうち5盟の名称は康熙41年にさだまり、のこりのシリーンゴル盟という名称は康熙45年あるいは49年の盟の時期に固定されたという解釈をしめした。オヨンビリグ（中国人民大学）「バドガル・ジョー寺の建立年代の考察—1点のバドガル・ジョー寺文書の解説」は、漢語で五当召（Wudangzhao）、チベット語でPad dkar chos gling、モンゴル語でBadyar juuとよばれる名利の建立年代が1750年であることを文書によって明確にしめした。なおバドガル・ジョー寺文書は現存の寺院文書のなかでもっとも完全であり、まもなく刊行されるという。

コーヒーブレイクのあと、4名が報告した。まずソドビリグ（内モンゴル大学）「義和団事件賠償金とモンゴルにおける開墾」は、義和団事件の賠償のために内モンゴルで開墾がすすめられた問題を取りあげ、他の地域では賠償のみかえりとして教育機関の設立等がなされたのに対し、モンゴル地域はいかなる恩恵も受けなかったことを強調した。つぎにオヨンゲレル（内モンゴル大学）「清代末期におけるロシア勢力のモンゴル旗への浸透」は、ジリム盟のホルチン右翼各旗の事例をもとに、洮南（Taonan）に領事館を設置しようとしたことなどに代表されるロシアの積極的活動について論じた。树林（Shulin, 内モンゴル社会科学院）「19世紀すえ、20世紀初頭のハルハ・モンゴルにおけるチベット語による著述の成果」は、19世紀すえ、20世紀はじめにモンゴル人学僧によるチベット語による著述が最盛期をむかえたととらえ、代表的著作を紹介し、とくに仏教史、政教二元論、詩

学理論などで成果があがったと強調した。J.ゲレルバドラフ (国立モンゴル教育大学) 「モンゴルのアイマク、ホシヨーの地図のひとつの宝庫」は、モンゴルの土地政策・測地・地図製作局 (Administration of Land Affairs, Geodesy and Cartography) の資料室に所蔵されている171点の地図を紹介した貴重な報告。もっともふるい地図はセツェン・ハン・アイマクのアハイ・ザサグ旗の1793年の地図だという。

午後の第3セッションでは5名が報告した。最初のN.ヤンポルスカヤ (Natalia Yampolskaya, サンクトペテルブルク東洋写本学研究所) 「トド文字の最古の写本か?」は、現カザフスタン東部にある Ablai-yin keyid 跡の調査で発見された3葉のトド文字写本断簡がザヤ・パンディタ訳の『般若心経』 (*Prajñāpāramitāhṛdaya*) に同定しうること、1650年代に作成された最古の写本の可能性があることをのべた興味ぶかい報告だった。つぎのエルデムト (中央民族大学) の報告「新発見のトド文字木版『四部医典』第1巻」もトド文字文献に関する重要な内容をふくんでいた。2019年の夏にイリ河流域で発見された木版本は、アバライ・タイジの要請でザヤ・パンディタがモンゴル語に訳した『四部医典』のテキストであり、出版の時期は1735年から1744年のあいだと推定しうるといふ。Ondrej Serba (チェコ科学アカデミー) 「平民の歴史: 18、19世紀の世俗的なモンゴル語文献にみられる時系列の概念」は、*Gerger qayan-u namtar, Jarong kašor suburyan-u tuyuji, Tobčilan jokiyaysan šasin-u jiruqai* という3種類のテキストを使用して18、19世紀をいきた世俗のひとびとの時間概念を検討した研究。Ü.トヤー (内モンゴル社会科学院) 「モンゴル文アルタン・ガンジョールのいくつかの問題」は、内モンゴル社会科学院図書館に所蔵されるモンゴル語のガンジョール古写本について、テキストの内容、訳者、文字などの問題を論じた。Ba. プフチョロー (内モンゴル社会科学院) 「*Teyireng-ün kereg-yin sudur orusiba* というテキストについて」は、同社会科学院図書館に所蔵される *teyireng* の起源、歴史、危害などについてしるした写本を紹介するとともに民間の *teyireng* 信仰との関係を検討した。*teyireng* はもともとは、チベット語の *the'u rang* に起源する一種の精霊である。

コーヒーブレイクのあとの最後の第4セッションでは5名が報告した。最初のチンセチン (内モンゴル大学) 「ハルハ地方における第6世ダライ・ラマの転生者の系譜の成立」は、文献資料、モンゴルのウムヌゴビ県、内モンゴルのアルシャー地方でのフィールドワークで収集した資料にもとづき、Tshangs dbyangs rgya mtsho の転生者、すなわちジャスライ・ゲゲーンの系譜について論じた。つぎのエルデネバートル (内モンゴル大学) 「イリンチンによるモンゴル秘史のウイグル式モンゴル文字テキストの復元について」は、秘史の *Tatar juin irken* (53節)、*hūjin* (55節など)、*Önggüd* (182節) についてのイリンチンの解釈を検討した。オルト (フルンポイル学院) 「ブリヤートとホリ・トゥメドの歴史的関係についての文献記録と伝承」は、『集史』の記述や“バルジン・ハトンの伝承”などに依拠しつつ、ブリヤートとホリ・トゥメドの関係について論じた。佟双喜 (Tong Shuangxi, 长江师范学院) 「北方から長江中下流域へ移住したモンゴル人に関する研究」は、元代に支配者として派遣されたり、清代に八旗兵として駐屯したりして残存し現地の民族と融合したモンゴル人の問題を社会学や民族学の方法論を援用しつつ検討した。魏建东 (Wei Jiandong, 中央民族大学) 「仰華寺での会見におけるモンゴル人使者」は、1578年の青海湖畔チャブチャール寺 (仰華寺) でのアルタン・ハーンとソナム・ギャンツォ (ダライ・ラマ3世) の会見の準備をしたモンゴル人使者の問題を新発見の漢語史料を利用して考察し、当時のモンゴル諸集団の分布についても検討した。

今回の会議での報告は最新の研究にもとづいた文献学的、実証的な内容のものがおおく、レベル

がたかく、たいへん有益だった。会議にあわせて簡単な『论文集』(Conference proceedings)は刊行されたが、正式の論文集を出版する計画はなく、人民大学刊行の雑誌等への掲載を予定しているという。

国際シンポジウム「ハルハ河・ノモンハン戦争80周年：新研究と新成果」

The International Symposium “80 Years Since the Battle of Khalkhyn Gol / Nomonhan:
New Studies and New Achievements”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)

Husel Borjigin (Showa Women's University)

2019年11月30日、国際シンポジウム「ハルハ河・ノモンハン戦争80周年：新研究と新成果」が昭和女子大学で開催された。昭和女子大学国際学部国際学科、公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA) の主催、公益財団法人鹿島学術振興財団、公益財団法人三島海雲財団の後援、麒麟山酒造株式会社の協賛を得ておこなわれた。同シンポジウムは、各国の研究の現状や課題を総括しながら、近代以降の、極東地域における長期にわたる変化を、ハルハ河・ノモンハン戦争を通して広く深くかえりみ、20世紀以降の北東アジアの秩序の形成と維持に果たした日本・ロシア・中国・モンゴルの役割をよみなおし、特色ある議論を展開することを目的とした。

同シンポジウムでは、坂東真理子・昭和女子大学理事長・総長が開会の挨拶を述べた。柳澤明・早稲田大学文学学術院教授、李守・昭和女子大学国際学部国際学科長が司会をつとめ、8名の研究者が報告をおこなった。

Ts. バトバヤル (Ts. Batbayar) (モンゴル国外務省顧問、元駐キューバモンゴル大使) の報告「ハルハ河戦争に関する研究：最新の研究と成果」は、2009年以降のモンゴル国におけるハルハ河・ノモンハン戦争研究の取り組みとその成果を紹介し、1930年代のソ連、ドイツ、日本の軍事戦略、ヨーロッパにおける戦争の勃発、日中戦争の拡大といった大国間の地政学的な観点から、モンゴル人民共和国の国際的なステータス、ハルハ河・ノモンハン戦争とその国際的な影響を検証することは重要だと指摘した。

V.V. グライヴォロンスキー (V.V. Grayvoronskiy) (ロシア科学アカデミー東洋学研究所首席研究員) の報告「ハルハ河 (ノモンハン) の武力衝突80周年——ロシアとモンゴルに残るその記憶」は、近年、ロシアにおけるハルハ河・ノモンハン戦争研究の成果を紹介した上で、同戦争が80年目を迎える2019年は、ロシア、モンゴル、中国、日本との相互関係の歴史からみて特別な意味を持つ年であると強調し、ロシアとモンゴル大統領が合意し、実施された両国の記念事業とその意義について述べた。

二木博史 (東京外国語大学名誉教授、日本モンゴル学会会長) の報告「1930年代に日本の軍部が作成したハルハ河近辺の外邦図について」は、ハルハ河戦争 (ノモンハン事件) の前に日本側が作成した代表的地図を焦点に分析し、『満蒙國境要図』(関東軍参謀部、1937年) では、ハルハ河中流域について、モンゴル側の主張にそって、ハルハ河を国境とはせず、ノモンハン・ブルド・オボーをとおる国境線のみとめていたこと、『西部國境線關係要圖』(関東軍司令部、1938年) には関東軍が満洲国とモンゴル人民共和国の国境画定の歴史的経緯につよい関心をよせていたこと、関東軍はハルハ河戦争の前にすでにソ連製の軍用地図を入手し、その複製も作成・配布し、モンゴルと満洲国の国境についてのモンゴル人民共和国・ソ連がわの立場を情報として共有していたこと、参謀本部が

ハルハ河を国境とみなす立場を最後までかえなかったのは、参謀本部の下部組織である陸地測量部の解釈を絶対視していたこと、などを指摘した。

佐々木智也（軍事史研究者）の報告「“失敗学”としてのノモンハン——日本での受容の一例」は、1980年代以降の「失敗学」的アプローチによる日本人のノモンハン観と、その特性や欠陥などについて批判的に検討し、日本におけるノモンハン研究は日本軍内部の人間関係の分析に力点が置かれるため、議論が日本内部のことだけで完結し、敵側についての議論や分析が完全に無視されるなどと指摘した。

ボルジギン・フスレ（Husel Borjigin）（昭和女子大学国際学部国際学科教授）の報告「ハルハ河・ノモンハン戦争の捕虜に関する新資料——モンゴルで発見された満洲国軍捕虜の資料を中心に」は、モンゴル国の公文書館に所蔵されている資料に基づいて、1939年のハルハ河・ノモンハン戦争の時、モンゴルにいた満洲国軍捕虜の状況を考察し、これら満洲国軍の捕虜はモンゴルでマルクス・レーニン主義の理論教育を受けたこと、また仕事があたえられ、収入を得ていたこと、モンゴル国の最高指導者チョイバルサン元帥が満洲国軍捕虜のなかの指揮官を接見したことなどを明らかにした。

L. ミヤグマルスレン（L. Myagmarsuren）（モンゴル国ハルハ河郡「戦勝博物館」館長）の報告「モンゴル国ドルノド県ハルハ河郡「ヤラルト（戦勝）博物館」の研究事業について」は、同博物館がおこなってきた、ハルハ河・ノモンハン戦争参加者の伝記研究と戦争考古学的発掘調査といった2つの事業を紹介し、こうした事業の推進によって、新しい研究領域が生まれるはずだと指摘し、モンゴル・ロシア・日本が共同で考古学的調査チームを組織し、調査を行うことを提案した。

下斗米伸夫（法政大学名誉教授、神奈川大学特別招聘教授）の報告「スターリンの東方シフトから見た張鼓峰事件とノモンハン事件」は、張鼓峰事件が、1930年代前半のNKVD秘密政治部という、赤軍政治部と並ぶスターリンの党機関がもっとも頼り、従ってスターリン内政の秘密を知るリュシコフ大将のハサン湖を通じた日本亡命直後の極東軍と党支配の崩壊時に生じたのに対し、ノモンハン事件は、(1) モンゴル国内にソ連軍導入を図る1936年の粛清、(2) 日本側での準備不足、(3) ソ連側の周到な準備、の中で生じた、というかんがえを述べた。

田中克彦（一橋大学名誉教授）「ノモンハン戦で関東軍とともに戦ったバルガ興安騎兵隊の政治的立場とその運命」は、マンチュリー会談の遠因を検討した上で、バルガ人を中心とする興安騎兵隊（興安北警備軍）が、満洲国軍に所属しているほかの興安各省のモンゴル軍騎兵隊とはことなり、高度な独自性をもっていたと指摘し、それはバルガ人の独立運動の歴史が長いことと関係し、ノモンハン戦争への参加のありかたにもかかわったと述べた。

オープンディスカッションの後、谷野作太郎（昭和女子大学客員教授、元駐中国・インド日本大使）が閉会の挨拶を述べた。

本シンポジウムの成果をまとめた論文集は2020年3月に風響社から刊行される予定である。

国際会議「ボグド・ハーン—150：歴史、文化、遺産」
International Conference “Bogd Khan-150: History, Culture and Heritage”

橘 誠 (下関市立大学)

TACHIBANA Makoto (Simonoseki City University)

2019年1月24日、モンゴル国大統領Kh.バトトルガ (Kh. Battulga) は、「第8世ボグド・ジェブツンダムバ・ホトクト生誕150周年を記念する件」という大統領令第9号を発した。遂行すべき行事として、ジェブツンダムバ・ホトクトの歴史的功績を記念する構造物をボグド・ハーン宮殿博物館の周囲に設置する、彼を記念する映画を製作する、彼の生涯に関する研究・史料を編纂することなどの他に、ジェブツンダムバ・ホトクトがモンゴルのために行った事績の歴史的・政治的な意義に関する国際学術会議を開催することが盛り込まれた。この国際学術会議を2019年10月11日・12日に開催するという案内が、5月初めに私のもとに届いた。会議は、モンゴル国大統領府、教育文化科学スポーツ省、モンゴル科学アカデミー国際関係研究所・歴史民族学研究所・哲学研究所・言語文学研究所の共催であった。

10月9日、会議に参加するために仁川経由でウランバートルに向かった。空港に着いて驚いたことは、事前に空港に迎えが来るとの連絡はあったが、飛行機を降りてすぐに迎えが待機しており、VIPラウンジに通されたことである。そこでパスポートと荷物タグの控えを渡し、そのまましばらく待っていると、入国スタンプが押されたパスポートと荷物が出てきた。迎えの車も大統領府が用意した車であった。

会議の開会式は、10月11日の9時から政府のスファートル会議室で行われた。まず、モンゴル教育文化科学スポーツ省大臣Yo.バートルビリグ (Yo. Baatarbileg) 氏 (代読)、モンゴル国大統領府長官Z.エンフボルド (Z. Enkhbold) 氏、モンゴル科学アカデミー総裁D.レグデル (D. Regdel) 氏、ガンダン寺管長D.チョイジャムツ (D. Chojiamts) 師らが言葉を述べた。全体での写真を撮影した後、O.バトサイハン (O. Batsaikhan, The Institute of International Relations, Mongolian Academy of Sciences (MAS)) 氏による “Assessment of the activities of the 8th Bogd Jebtsundamba khutuktu, the leader of the Mongolian national revolution of 1911”、中見立夫 (NAKAMI Tatsuo, Emeritus of Tokyo University of Foreign Studies) 氏による “Some remarks to the information related to the VIII Bogdo Jebtsundamba khutuktu among the Japanese historical sources”、S.L.クズイミン (S.L. Kuzmin, Institute of Oriental Studies, Russian Academy of Sciences) 氏による “VIII Bogdo Jebtsundamba khutugtu and Independence of Mongolia: Historical lessons learned” と題する三本の基調講演が行われた。

その後の報告は二つの部会に分かれて行われた。私が参加した第一部会では、15名の報告が予定されていた。以下に、報告者と所属、報告タイトルを列挙する (英語表記はプログラムの表記に従った)。

J. Boldbaatar (Academician), “Intellectual and Ethical Philosophies in the prophecy “Aya, gaikhamshigt” (“oh, wonderful”) and other teachings by the 8th Bogd”

- Udo B. Barkmann (Mongolist), “The Bogdgegeen and the higher nobility of Outer Mongolia. An attempt at explanation of the juridical relationship between the sovereign and the higher nobility”
- Z.Lonjid (National University of Mongolia), “The state of Mongolia 1911-1919: Novel ways of fostering Buddhism”
- T.Bulgan (National University of Mongolia), “Reflecting on knowledge of the Bogd Khaan, Spiritual leader of Mongolia: Kalachakra knowledge”
- Tachibana Makoto (Shimonoseki City University), “The transition of the political power of the Bogd khaan: An examination from the perspective of the Tibetan factor in Mongolia”
- Yuri Vasilyevich Kuzmin (Baikal State University), “Russian-Mongolian relations on the eve and during the establishment of the national independence of Mongolia and the contribution of the translator and Mongolist R.B.Bimbaeva”
- B.Punsaldulam (Institute of History and Ethnography, MAS), “VIII Bogd Jebtsundamba khutugtu in the Mongolian historiography”
- G.Dashnyam (General Archival Authority), “VIII Jebtsundamba khutugtu, the limited monarch of Mongolia”
- Lubov Nikolayevna Krainova (The Regional Institute of Lifelong vocational education and human resources), “The theocratic leader and the last king of Mongolia, Bogd Jebtsundamba khutugtu, through the eyes of modern world: Historical conflicts and its result”
- Ts.Gantulga (Mongolian National University of Education), “On measures of the government of the Bogd khanate Mongolia against opium”
- D.Enkhtsetseg (National University of Mongolia), “Facts related to the State Queen Mother”
- T.Sainjargal (National Central Archives), “The historical importance of the decrees by the 8th Jebzundamba khutugtu as primary source”
- Karolina Zygmanska (Mongolist), “A living god, a political leader, a human being: the image of the 8th Javzandamba khutuktu in the memories of the western travellers”
- D.Davaasuren (Mongolian University of Art and Culture), “Literatures by Luvsanjambaa related to the VIII Bogdo Jebzundamba”
- N.Khatanbaatar (Institute of History and Ethnography, MAS), “On the Darkhan juukh for the lamas of sain noyon ayimag”

このうち、Y.V.クズィミン氏、Ts.ガントルガ氏、N.ハタンバートル氏は都合により欠席された。ボグド・ハーンの生誕150周年を記念する会議ではあったが、ボグド・ハーンそのものを対象とした報告は少なく、ボグド・ハーン政権の政策やモンゴル史学におけるボグド・ハーンの評価のような報告が多かった印象である。

会議の合間に、海外からの参加者は、今回の会議を後援したバートルガ・モンゴル国大統領を表敬訪問する機会を得た。短い時間ではあったが、各自が自己紹介を行い会議についての感想などを述べた。その後、大統領は一人一人との写真撮影に応じてくれた。また、この表敬訪問に先立ち、参加者の一人であるドイツの研究者ウド・バークマン (Udo B. Barkmann) 氏が、モンゴル研究への貢

献が評価され北極星勲章を授与された。

私自身は第二部会には参加できなかったが、参考までに報告者と所属、報告タイトルを挙げておく。

M.Gantuya (National University of Mongolia), “Some religio-psychological approaches to the Bogdostudies”

R.Byambaa (Warsaw University), “Some letters written in Tibetan related to the eighth Jebtsundamba khutugt”

Krisztina Teleki (Eötvös Loránd University), “Inventories of Urga’s temples written in 1909”,

R.Otgonbaatar (The Institute of Linguistics and Literature, MAS), “The origins and interesting facts of songs about the Bogdo Khaan”

Kh.Munkhbayar (Researcher), “Great Mongolian naadam festival and Bogd khaan”

D.Dashdulam (National University of Mongolia), “Understanding of Japanese people on the VIII Bogdo Jebzundamba khutugtu and events occurred in the Khuree”

G.Bayarmaa (National Museum of Mongolia), “Internal fund of Jibtsundamba khutugt”

Ch.Gansukh (National Library of Mongolia), “About Mongolian and Tibetan resources of literature named “Prophecy of the 8th Bogd””

D.Munkh-Ochir, “Legalization of the chronology in Bogd Khanate of Mongolia (1911-1921)”

T.Sukhbaatar (Mongolian National Defense University), “Defense policy of Bogd khanate of Mongolia (1911-1921)”

Ts. Narangerel (Mongolian National Defense University), “Bogd khan and battle of five roads”

Kh.Orkhonchimeg (Mongolian National Defense University), “Education of Mongolian military during the period of Bogd Khanate Mongolia”

U.Purevjav (Institute of History and Ethnography, MAS), “Ritual meaning of the Öndör geegen Zanabazar’s teaching”

N.Saruul (Ph.D Candidate, Minzu University of China), “A research on the fourth Jebzundamba’s Reincarnation and enthronement process in Tibet and state policy by 17 Manchu”

D.Tsogzolsuren (Gurvan Erdene University), “On the Mongolian state policy of the aristocrats’ titles and ranks (1911-1919)”

S.Yanjinsuren (National University of Mongolia), G.Lkhagvasuren (Bogd Khaan Palace Museum), “Analyzing the Tsogdogmarav idol at the Bogd Khaan palace museum”

17時から全体会議が開かれ、各部会の司会者らが部会の総括を行った。夜は参加者が投宿していたグラント・ホテルでレセプションが開催された。

翌10月12日は10時より、2019年にガンダン寺境内に完成したばかりのバトツァガン伽藍において、ボグド・ハーンの生誕150周年を記念した論文集 *Институт Богдо-гэгэна в истории Монголии: К 150-летию Богдо-гэгэна Джебцзундамба-хутухты VIII - последнего великого хана монголов* の刊行

記念のイベントが行われた¹。その後、ガンダン寺管長チョイジャムツ師の案内で伽藍内を参観した。

昼食後は、エクスカージョンとして中央県に建設中のマイダル仏をランドマークとしたエコシティを訪問することになっていた。他の参加者はそちらに向かったが、私はスケジュールの都合上、ガンダン寺からホテルに帰り、帰国の準備をした。帰りも同様に大統領府の車で空港まで送ってもらい、パスポートと荷物を預けてVIPラウンジで搭乗まで待ち、仁川空港経由で帰国した。

ジェブツンダムバ・ホトクト、そしてボグド・ハーンは、社会主義時代には封建勢力の領袖として否定的に評価されていた。民主化後もナショナリズムが高揚する中、その他のモンゴル王公たちが「モンゴルの英雄」として再評価される一方で、チベット出身であることから本格的な研究は少数の研究者を除き行われてこなかった。この度の国際会議がボグド・ハーン研究進展のきっかけになることを期待したい。なお、本会議の報告論文集は2019年12月に刊行されている。

1 本論文集は、<http://book.ivran.ru/book?id=1468&from=990>よりPDFバージョンの全文ダウンロードが可能である。